

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第五十六卷

第十二号



12

日本幼稚園協会

トツパンの 人形絵本



かわいの人形を美しい舞台にのせて天然色写真で撮影して作った楽しい人形絵本

- ★ちびくろ・さんぼ
- ★ぶれーめんのおんがくたい
- ★やん坊にん坊とん坊
- ★三びきのこぶたのたんじょうび
- ★三びきのくま
- ★いっすんぼうし
- ★あかさきんちゃん
- ★ねむりひめ
- ★じゃつくと豆の木
- ★びーたーとおおかみ
- ★きんのがちよう
- ★しらゆきひめ
- ★おやゆびひめ
- ★ねむりひめ
- ★まっちゃんりの少女

各一〇〇円

東京日本橋茅場町

トツパン

幼児のための紙芝居

十一月一日全国一斉配本

幼児テキスト紙芝居全集

全二十四巻・各巻十二枚・定価二六〇円

全巻定価六、二四〇円・毎月二巻宛配本

にぼとおほのだいらようこ
にぼちゃん象は、おとうとおぼちゃん象をつれて、さんぼにでかけましたが、わなにかかったおぼちゃんのために、大かつやく。

しんじゆのなみだ

ながいこと病気でねているおかあさんのために、おんなの子は町までおくすりをもらいに行きました。そして、そのかえりみち……。

動物名作物語紙芝居全集

全十巻・各巻二十四枚・定価五〇〇円

全巻定価五、〇〇〇円・毎月一巻宛配本

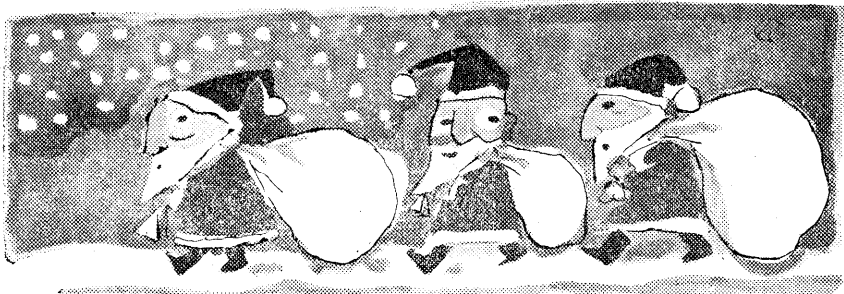
灰色熊ワープ
母親熊の死によって、たのしい、平和な親子熊の生活はこわされました。小さかったワープも、いつしか森林の王者となつて……。

御申込次第
美麗カタログ
進呈ノ

株式会社

教育頁劇

東京都渋谷区千駄ヶ谷四ノ七一四
電話04一四五八・三二七三・三四〇〇
振替 東京 二九八五五



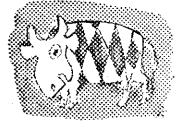
幼 児 の 教 育 目 次

第五十六卷 十二月号

表 紙……………武井武雄

脳性小児麻痺……………	齋藤文雄……………(2)
幼児の知能テストについて①……………	小口忠彦……………(6)
幼児の発達と教育計画①……………	津守真……………(10)
世界一長寿の国デンマーク……………	戸倉ハル……………(15)
第六回全国保育大研究会を顧みて……………	副島ハマ……………(18)
生活記録「とんびのえのぐ」と創造美育のあり方……………	林健造……………(20)
園長雑感……………	太田すえ……………(25)
(ヨーロッパの遊イギリスに渡る……………	平井信義……………(28)
幼児教育寸描……………	……………(32)
幼児とともに(加藤邦子) 早く字を覚える子どもをどのように理解するか……………	……………(32)
(長崎祐子) K子ちゃんの経験を通して(毛利倫子) 女性である幼稚園教諭の立場から思う(岩崎里美) 保育室で思う(山本光) 自由保育のむずかしさ(島田みつ子) 保育日誌をかえりみて(鈴木輝子) この頃思うこと(田中阿い) 初心者の悩み(鈴木ノリ) 日常の記録のこと・知能テストのことなど(菊地明子) 思いつくまに(庭瀬貞子) 玩具祭りの功罪(玉川喜代子) こんなセンセイになりたい(谷野恵美子) 私たちの職員室(上山幸子) 私の宿題(穴井曜子) 保育者の喜び(樋口伊都子) 掃除をしながら考えること(栗田成子) 保護者にどのくらい協力しなければならぬだろうか(杉本知子) 私の園における問題点(斎藤勝子) 共稼ぎ雑感(玉木直子) 新しいものへ(丸杉澄子)……………	……………(56)
保育雑誌より……………	……………(56)
第五十六巻総目録……………	……………(60)

編集主幹 及川ふみ 編集主任 津守 真
 協力委員 牛島義友 齋藤文雄 多田鉄雄 波多野完治 山下俊郎 (五十音順)



脳性小児麻痺

齋藤文雄

いわゆる小児麻痺とふつういわれているのは急性脊髄前角炎、すなわち脊髄性小児麻痺ともいっている病気である。これは四肢の弛緩性麻痺をきたすが、ふつう知能障害はおこさない。身体が不自由なだけで知能はふつうに伸びる。肢体不自由児といわれているものの大部分はこの病気にかかった子である。これと混同されやすいが一方に脳性小児麻痺がある。手足の自由も大なり小なり束縛されるが、同時に精神発達も阻害される。

この病気は何が原因で起るか。血族結婚などの場合には遺伝的な要因も考えられているが、それよりも多いのは妊娠分娩との関係である。妊娠中に、トキソプラズマ症、風疹、梅毒などにかかるると胎児の脳に影響がくる。さらに母体の極端な栄養不良、レントゲンなどのたびたびの照射も影響がある。胎児の発達過程中、脳に奇形ができて、それが原因となることも考えられる。さらに分娩時の障害、すなわち無酸素症、頭蓋内出血、溶血性黄疸（血液型不適合が多い）などの

ために、生れてから不幸な脳性小児麻痺をおこす。無酸素症や頭蓋内出血は未熟児にことに頻度が高いから、未熟児では脳性小児麻痺をおこす可能性も高いことが知られている。出生後でも脳炎、脳の外傷などで脳性小児麻痺にかかる子もあるわけである。

結局脳性小児麻痺にかかるると精神発達は多かれ少なかれ障害を被るから精薄児という烙印がおされる。こういう子どもが、現在推定四十万人日本にいたるといわれている。こういう不幸な子どもの病気は一日も早く、あとを絶つところまではいかないとしても減少させなければならぬ。ところが皮肉なことに医学の進歩に伴って脳性小児麻痺は増加している。前述のようないろいろな原因が妊娠分娩、その後の経過の間に子どもの脳に打撃を与えるのであるから、その原因除去にはおおいに努力しなければならぬのは当然であり、その方向に進んでいることもたしかである。しかしながら、医師は子どもの生命をおびやかすその刹那刹那の病気なり障害なり

の除去に骨をおる。明らかに脳障害を起したと考えられるような無酸素症、頭蓋内出血などが診断され、将来脳性小児麻痺出現の可能性が十分であると認識したとしても、医師自らの手でその子を死に導くような治療はおよそ考えられないことである。何とかして一刻も早く、その子の生命の危機を脱せしめたい希望のもとに万全の治療を試みる。この万全の治療という治療方法は近年、年とともに著しく進歩した。昔なら助からなかったであろうかすかすの出産前後の病気で、今では子どもに死の転帰をとらせることなしにすむようになってきた。たとえば未熟児でもそうである。未熟児は体重が小さく生れれば生れるほど頭蓋内出血も起しやすい。生下時体重一キログラムの未熟児でも今は助かる可能性が多い。精薄児を作りやすい結核性髄膜炎・日本脳炎などにしても、昔なら助からなかった程度の病気が今ではらくに助けることができる。これが医学の進歩というものであるが、そういう脳性小児麻痺なり、精神薄弱なりをおこす可能性のじゅうぶんな子どもが、どんどん助かってくるようになったのであるから、こういう子どもの数が年々増加してゆくことも当然のことである。一見矛盾のようであるがけっしてそうでない。そうなると、脳性小児麻痺のおこる可能性がある原因については、十分な検討とその除去対策がたてられなければなら

ない。あらゆる方面からの予防対策がたてられるのは当然で、現在医師はその方面の開拓に努力しているしだいであるが、さてこういう問題は医師だけの解決は困難であり、一般社会のかたがたにも理解がないと効果があがらない。ことにわが国は分娩の九十%以上は家庭分娩であり、もっぱら開業助産婦の手によって介助がおこなわれるような状態で、万一の異常産の場合、応急的な正しい処置を期待することは困難であるといわなければならず、一般家庭のかたがたにもそういう認識のもとに子どもをもうける覚悟が必要である。

いづれにしても、皮肉であろうとなかろうと、現在では脳性小児麻痺はふえつつある。医学が進歩しつつあるなら、こういう病児の治療にもっと適切なものがでてきていいのではないかと思われるが、まだ申し上げられるような適確な治療法はない。それは脳という組織の特殊な解剖学的所見からいって、いよいよ困難なものに考えられている。出血とか、無酸素症とかでいちど退化した脳細胞は再生しない。隣り近所の細胞で失われた機能を代償させることもはなはだ心細い。ある血管によって栄養分が補給され、酸素が送りこまれる脳のある細胞群があるとす。その血管が破れる。そうするともうその細胞群は他の血管によって代償されることがないからたちまちにして退化（未熟児の仮死の場合など僅かの時間

呼吸がおこなわれなくても、もう脳細胞は退化してしまふ)して、永久の損傷を受ける。こういう事情もあって、現在では失われた脳細胞に活を入れて再生させる手段は考えられていない。ちょうど火傷の傷あとの癩痕をそのまま普通の皮膚に再生させよというのと同じ理くつである。要するに手や足の不自由さを加減してやるのが最大の治療でその根本の脳に積極的な治療を加えうる段階にはまだ達していないのである。

それでは現在の脳性小児麻痺患者はどうしたらいいのか。その対策は医学だけに限極された問題ではない。国の行政、社会的理念と施設の拡充、教育、保健、結局一つの国の文化的な仕事としての発展が望まれるだけである。程度の差はどのようにであろうとも、その子の享受しうるものも楽しい、そして保健的な環境を与えてやるのが現在の最大の贈り物である。こういうことを幼児の教育誌上に掲載するのは当を得たものではないようであるが、多くの健康な明るい子どもたちばかりではない。恵まれない子どもたちも、いっしょに生長しつつかあることをいつも頭の中に入れておいて、どういふ場合でもそんな子どもにも協力することをふだんから子どもたちに話しかせてほしいからである。

テレビ眼症。近頃、眼科医の間にテレビ眼症という新らし

い眼病が話題を提供している。要するにテレビの前にかじりついている幼児にみられる視神経の疲労症であるという。セツトの良否にも関係しよう。映像のフィックス、アップの上手下手にも関係しよう。映像と子どもの位置との距離、見ている時間の長さ、いろいろなファクターが総合して子どもの眼を疲労させると思われる。ことに問題なのは、就寝時間がきても寝ない、夜ふかしをする、結局睡眠時間が短縮されることである。テレビ眼症が視神経の疲労でおこるとしたら、その疲労を回復させるのはじゅうぶんな睡眠時間以外にはずである。テレビで眼を痛め、さらに睡眠時間を短くして眼を痛めるとしたら、この現象はうかつに放任できない問題である。

子どもの教養、躰けなどの面から見たらテレビの内容はほとんど落弟であるかもしれないが、保健面からみても実に困ることがある。コミックではあるが、ザアマス族が鯨は手でつかんで頂かないと味がございませんとばかり、手を拭くこともしないで指で召上って見せたりする。テレビの始めから終りまで子どもに見せる必要はない。早くきりあげる工夫が必要であろうが、親の心がけに期待しなければならぬ。テレビのような暗いところで眼を使った場合の疲労回復には、睡眠以外にビタミンAの補給が必要である。平常補って

やる方がよからう。

幼児の食生活。育児思想が普及、徹底してくるにつれて、乳児期の子どもの健康は著しく改善され、ここ十年間で見違えるほど立派な発育が見られるようになった。その延長というか幼児期の発育もずっと改善され、うっかりすると小学校の児童かと思われるくらい立派な子が見られるようになった。もっとも子どもの発育生長の過程が進んだのは日本だけの新しい現象ではなくて世界的な傾向である。どこの国でも子どもの発育はよくなってきている。

この根本には保健的な生活と、正しい栄養の実践という二つの問題が改善されつつあるからと解釈することができよう。ところが幼児期の子どもの正しい栄養という点では、まだ満足できない点がしばしばみうけられる。それは母親がその子の乳児期にあまり力をそそぎすぎて神経をすり減らしたせいもあるかもしれないが、とにかく乳児の食生活ほど力を入れられない傾きが見られるのは遺憾である。

漸くここまで育てあげたという母親の安心感がそうさせるのか、すでに生れた次の子の乳児保育に幼児を顧みらいとまがないのか、それはわからない。

しかし栄養学的にみて幼児期はどうだろう。蛋白質の摂取量、カルシウム・ビタミン等々発育に不可欠の成分の補給に

はまだまだ手綱をゆるめるわけにはいかないときである。ビタミンB₂の欠乏のため口角炎を起したり、偏食のため便通が一日おきにしかない子がきたりする。ビタミンは補っているかという質問に対し赤ちゃんのときは毎日やっていましたか今はやめています、という返事はよくきかれることばである。乳児期には栄養学の理想とするところとその食生活の実践との間にあまりかけ離れた距離はないのが普通であるが、幼児期になると多くの場合、この二つの間の距離のひろがりを見せている。

食生活に対する幼児の自主性の発現、そして偏食、間食等複雑さの加わった幼児の食生活が始まるわけであるが、幼児の食生活に自主性が出たからといって、それを放任しておくわけにはゆかない。それとなく正しい方向に導いてゆく指導性は乳児期にも増して必要となってきた。けっして野放しにはできないはずであるが、しばしば欠陥の多い食生活のまま放任されているのを見る。

とにかく家庭の食生活は嗜好本位のおとな中心のものになりがちであるが、幼児期はまだ乳児期に次いで重要な発達段階にある時期であることを考えて、少くとも月に一回ぐらいは幼児の食生活についての反省をしてみるべきであるし、家庭の食事も幼児のそれに歩みよりを見せるべきである。



幼児の知能テストについて ①

小 口 忠 彦

一般に、知能テストについての考えかたには、反省しなければならぬ点が多い。ここでは、あまりむずかしいことやこまかいことはさて、次の三つにわけて述べてみたい。第一は、子どもたちの知能を調べることの意義。第二は、いよいよ何かの方法で調べることに手をつけたときに、どういう注意をしたらよいか。第三に、調べをおえたとき、結果の後始末をどうしたらよいか。

まず、第一の問題についてとりあげるが、もし正しい考えかたをもっているならばおおいに自信をもち、まちがった考えかたをしていぬならば、正しい方にむけていただきたいものである。

さて、ぼつぼつ知能テストについての偏見にふれることになるが、今までいろいろ調べてみたところでは、次のような結論がでた。すなわち、知能テストにあまり多くの期待をかけすぎてはいけない、ということである。これには二つの理由がある。その一つは、知能テストもだいが改善されてきたけれども、まだ安心して使えるほどにはよくなっていないことである。はっきりと子どもたち

の知能を調べてみたいと思っても、実際に現在の知能テストにのってくるものが、子どものほんとうの知能かどうかからないうこともあるわけである。これは、知能テストをやらなくてよい、知能テストを馬鹿にしてみえ、というのではなくて、必要以上に期待をかけてはいけないということである。知能テストの結果あらわれる数字通りの知能が、個々の子どもにあるかどうか、はっきりしないからである。

このことについて少し考えてみよう。知能テストをつくったことのある人と、知能テストをつくったことのない人とは、知能テストについての評価に違いがある。私は、知能テストをつくったことがないし、また批判する立場の一人だと思っているが、知能テストをつくった人は、テストをややもすれば必要以上に信頼している。自分が知能テストをつくれれば、多少の欠陥のあることがわかっている。自分も良く評価したいのは人間としてあたりまえである。そこへいくと、知能テストをつくったことのない人は、つくっている人

にくらべると批判的である。しかしそれにはそれだけの理由がある。つまり批判されても仕かたがない理由は、現在の知能テスト、そのものにあるのである。これは、知能テストについての舞台裏の一エピソードであるが、現在では、知能テストは、日本全国で百くらいあり、知能テストを販売している出版社では、とかくテストのよい面についてのみ宣伝しがちであるから、細心の注意をしなければならぬ。

もう一つの注意は、知能テストが正確なものだと仮定して、慎重にテストをすれば、その結果は信頼できて、子どもにどのくらいの知能があるかを外からよみとることができることになる。けれども、子どもの知能がどの位あるとはっきりわかったとしても、それがいったいどれほど教育に価値があるかを考えるべきである。子どもたちの指導法にどんな影響があるものかについて、静かに考えてみていただきたいのである。

だいたい、知能テストは、どのくらい優秀な知能を持っているかを見るよりも、この子どもは将来人の中に立って一人前の仕事なり生活をするのできるだけの知能を持っているかどうか、いいかえれば、精神薄弱、また、それに類した程度の知能しかもっていないというようなことはないか、をみるのに役だてるのがいいのである。平均よりもすぐれている子どもを小さきみにして、どのくらいすぐれているか、をしらべるのは骨がおれる。つまり、劣っているのをみつけ出すには役にたつ。一九〇五年、フランスのビネーが初めてビネー法を創ったが、ビネーのねらったのは、いま述べたようなことであつたのである。

多くの人にテストをして、このうちの誰の知能が第一、第二という考え方でなく、何か仕事をさせるとき、また、本人がやろうとするとき、力がなくて、うまくできないことがあるだろうが、あまり多くの期待をかけられない人が、この中にいるかもしれない、いるとしたら、それは誰か、ということをしてテストで見分けようとしたのが知能テストの出発点だったのである。それが、五十年の間に、知能の劣つた人を見分けるほうは軽くみられ、序列をつけることに関心が向けられるようになった。中の広い期待を知能テストにかけすぎているようである。

やはり、現在のテストには、そこまで期待をかけてはいけない。知能の劣つている子どもを見つけることに関心を向けるべきである。平均以上の良いほうの子どもの知能の程度がわかつたとして、それほど、その子どもの指導につながるものではないのである。お金のないとき、百万円当たらと考えている人が、実際当つてみたら、その金をすっかりしまいこんでしまつて、生活にそれほどの変化がなかつた、というようなものである。

幼児の場合ではないが、もう少し具体的にいってみよう。

幼児期を過ぎて小学校に入ると、教科の勉強が始まる。そして、幼稚園の先生のように、小学校の先生も、個々の子どもたちの知能を知りたがっている。小学校の先生も、知能テストをするが、指導に熱心な先生は、知能テストにそれほど期待をかけていない。知能テストをすることに、あまり熱心な先生は、実際の指導には熱心でないものである。

三年になると掛算をする。子どもたちは、九九をお経の文句のよ

うに覚える。覚えないと掛算も割算もできないので、子どもたちは、何のこともなく、「三・一が三」とおぼえこむ。そして、何の抵抗も感じない。しかし、数学についてよくわかつてる先生は、「三・一が三」とおぼえたからといって、それだけで手を抜いてしまわない。ある一定の時期がくると、それが本当にわかっているかどうかに懷疑をもつ。実際、子どもには、 $3 \times 1 = 3$ ということがわからな $い$ 。 $3 \times 2 = 6$ や、 $3 \times 5 = 15$ などのほうが子どもたちにはわかり易い。二倍や五倍は、前に習った加算と関連してとらえられるのであるが、「一倍」ということはわからない。実は、これがわからないということは、知能と関係はない。知能の程度の高低にかかわらず、「一倍」ということはわからないのである。

知能の程度がわかれば、よい指導をすることができるとおもっている先生は、ツメコミ式の指導にながれやすい。

もう一つ例をあげよう。小学校の一年では、「数」を教えなければならぬが、先生の導入の上手下手によって、知能の高い低いに関係なく、悪い学習をさせてしまうことがある。三年になつて掛算をする。さっきあげた $3 \times 5 = 15$ を良く覚えさせようとするときに、なぜ、三に五を掛ければ十五になるかを、図に書かせてみる。このとき、ある子どもは、三が五つあるのだからと、初めの三だけは、お団子のように丸を三つ書いて、あとの四つは棒を引く。丸を三つずつかく代りに棒をひく。それだけ簡略化していることになる。ところが、中には、全部三つずつのお団子を書かなければ気のすまぬ子どももいる。こういう現象は、知能テストの結果と一致するとは限らないのであって、一年で、数にはいるときの指導

法がうまくいっているかどうか、尾をひいているのである。

いま、小学生の例をあげたが、幼児期においてもどうようである。知能が高くなっても、もっている知能を、できるだけ活用できるように幼稚園の環境がなっておれば、子どもたちの知能は伸びてゆく。知能がすつきりとわからなくても、指導はできるものである。知能テストが完成に近づくにつれ、それとあいまって、指導法も改善されるにはちがいない。が、突然変異のような、指導法の革命はないと考えられる。知能を知りたい、知能が分りさえすればいい指導ができるのに、と考えているのは、観念的で、そういう考えかたをしている先生は、実際の指導に欠けている点があるのではないか。

以上、知能テストに必要な以上の期待をかけないほうがいい、という理由を述べた。

つぎへ進もう。知能テストは、やった方がよい。しかし、知能テストだけによって子どもの知能を調べることは、感心できない。知能テストと、日頃の観察との双方を結び合せて、大体的見当をつけるべきである。

ややもすると、知能テストは知能検査、観察は観察、というように断片的になりやすいが、そうではなく、テストをしても、それだけでは、子どもの知能はつかみにくいから、その補いとして、日頃の行動観察を活用する、という折衷的方法を採用するがいい。

愛育研究所の村山貞雄氏が、「幼児の教育」に幼児の知能について連載したものがあつたが、その中に、幼児の知能を調べるためにはどんなぐあいに観察したらよいか、まとめてある。以下、それを私な

りに修正して述べてみよう。

(1) どの程度記憶できるか。これは、知能テストの中にもあるが、新しい歌をおしえるときに、すぐ覚えるかどうか、遊戯やコトバなどのおぼえ方が、ゆっくりかどうか。

(2) 絵本を読むかどうか。本をみるのが好きかどうか。本を見る目の色をかえてとびついてくるか。また、自分で読むだけでなく、先生や、親に、「読んで」と頼むことをするかどうか。

(3) 記憶と関係があるが、ものを覚えようという気力があるかどうか。町を歩いていて魚屋を教えてやったようなばあいに、知らぬ顔でいるか、または、覚えようとするか。すなわち、新しい刺激を受けとめておく意欲・気力があるかどうか。

(4) 子どもが自分でやっていることで、うまくいかなかったばあい、うまくいかなかったことに気づくかどうか。だからとやっているか。これは、いけなかった、という挙動が見られるかどうか。砂場・積木あそびのときなどに、こういう挙動が見えるかどうか。

(5) コトバづかいで、条件つきのコトバ、かもしれない、「だろう」、「もし……ならば」などがみられるかどうか。断定して使ったコトバは判断力があるようにみえるかもしれないが、適切って使わないで、条件をつけるのは、子どもが頭を使っている証拠になる。

(6) こまかいことに気づくかどうか。気づいていても、コトバにだして表現するかどうかわからないが、幼稚園にいて、ピアノやオルガンの位置のちがいに気づくかどうか。また、昨日は入っていないなかった窓ガラスが、今日は入っている、こういうことに気づくかどうか。卑近なことから念の入ったことまで含めて、こまかいこと

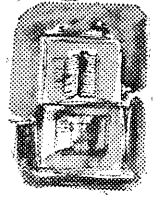
に気づくか、ぼんやりしているかを観る。

(7) コトバや動作が、要領をえているかどうか。コトバの方だと、子どもの話す内容が、豊富か。種々のコトバが使えるか。すなわち、「語い」が豊富か。いつも同じようなことを言っているかどうか。話していることがまとまっているか、断片的か。動作のほうでは、たとえば、「窓を閉めなさい。」といわれたとき、手ぎわよく閉めることができるか。障子などを閉めるばあいに、合わせぐあいに気をくばっていると、シリの方が空いてしまったりするものだが、こういうことがだんだんに要領よくできるようになるかどうか。すなわち、一方に気をつかっていると、他方がお留守になるものだが、全体に頭をえるかどうか、を観察する。戸の開閉を例にとったが、いわゆる「習慣」とは区別しなければならぬ。

この他、村山氏のあげているケースに、二、三あったが、重要で、すぐ役立つものをあげてみたのである。

村山氏は、お母さんがたに、自分の子どもを観察して、ひじょうにいい、やよいい、ふつう、ややわるい、ひじょうにわるい、というように五段階に品等してもらい、そしてその子どもたちに、実際に知能テストをして、同じように五段階に品等してみた。その結果は、お母さん方がやったのと大体あっている。これからしても、計画的に観察したら、知能テストをやらなくてもよいくらいに子どもの知能の程度はわかる、といっている。一方では観察をし、他方では知能テストをやってみる。そうして、双方を合せて、この子どもの知能の程度は、この位だとみることが、われわれにできる範囲のことだ、と考えればいだろう。

(つづく)



幼児の発達と教育計画 ①

津 守 真

私はここで、幼児の発達を中心とした教育計画について考えてみたいと思う。それには二つの問題がふくまれている。第一には、教育計画と直接関係のある発達の側面は何かということ、幼児期にはそれはどのような発達段階にあるのかをみることである。第二には、幼児期の発達にもとづいた教育計画とはどのようなものかということである。

まず、第一の問題から考えることにしよう。

教育計画には子どもの発達の状況をきりはなして考えることはできないし、発達を無視して教育計画を考えるならば、それは生活から遊離してしまう恐れがある。ことに幼児期にはいろいろの基本的能力が発達する時期なので、発達を促進させるところに教育計画の意義も生れてくる。このように考えると、幼児の発達のあらゆる面が教育計画と関係をもってくるが、とくにここでは教育計画全般と

直接関係のある側面をとりあげてみたい。

一、おとなと子どもとの関係の発達

教育計画は、おとなと子どもとの間に成立するものである。おとなが子どもに対してある関係を保って教育計画がおこなわれるので、子どもの発達につれて、おとなと子どもとの関係が変化していくならば、教育計画の性格も変化してゆくことになる。そこでおとなと子どもとの関係が子どもの発達とともにどのように変化するかをみて、教育計画の性格の変化を考察してみよう。

子どもは生れたときからおとなと密接な関係をもっている。その第一の時期は、おとなが子どもをもっぱら保護する時期である。生後半年、あるいは七、八か月までの乳児は、自分が生存するのに必要なことをおとなにやってもらわなければ、自分で食事をとること

さえてできない。子どもが生存するのにおとなに依存することが必要であり、おとなは子どもの必要としていることをもっぱらみたくやるのである。だから、子どもが乳を欲するときには乳をあたえ、睡眠を欲するときには睡眠できるようにして、子どもの要求と必要としたがっておとながそれをみたくしてやるところに、この時期のおとなの機能がある。すなわち、この時期は子ども中心の時代であり、子どもが中心となってまわりの世界が廻転する。おとなは子どもに従属しており、子どもはおとなにまったく依存している。

第二の時期は子ども全能の時代である。年令からいうと、生後八、九か月から一年半くらいの間である。この期間に子どもは自分の要求を意識するようになり、自分の意志をもつようになる。食物にも好きなものと嫌いなものができ、玩具も、いまこれで遊びたい、あれではいやだというような選択が生じる。気にいらぬことがあるものを投げて怒ったりする。このように子どもは自分の要求を意識して通そうとするが、まだ他人の要求や意志を理解しない。「これをしてはいけません」というようなおとなの禁止を理解できないから、おとなが何をいっても馬耳東風である。子どもには自分の要求が意識されているだけで、他人の要求は意識されないから、子どもの世界にはいわば自分の意志だけしか存在しない。いわば子ども全能の時期である。そしておとなは子どもの要求をある程

度みたくしてゆくことが必要であり、それによって子どもはおとなに対する基本的な信頼感をもち、また外の世界に対する積極的な関心をもつことを学んでゆくのである。

第三の時期は、いわゆるしつけの時代である。年令からいえば、一才半から三才くらいの間である。この時期には子どもの意志や要求がいつそうはつきりしてくる。またおとなの意志や要求をも理解するようになり、「いけません」というおとなの禁止がわかるようになる。こうなると子どもの意志とおとなの意志とがしばしば対立するようになる。子どもはお菓子をくれというし、おとなはいまはいけませんと禁止をする。こうして、この期間を通して子どもは自分の意志を通すことを学ぶと同時に、ある場合には自分の意志が通らないことを学ぶ。子どもにとってはおとなと力だめしをする時期であり、おとなにとっては訓練、しつけの時期である。すなわち、この時期には、おとなはどんなことがあっても子どものいうことをきいてはならないことがあるし、子どもの意志を通してよい場合と悪い場合とをよく見わけることが必要になる。

上の三つの時期は、おとなとの関係といっても、その大部分は母親との関係である。あるいは、母親がわりの特定の保育者である。上にのべたように、これらの時期には、子どもの個人的な要求をみたすことがきわめて必要なので、この時期に母親はひじょうに大き

な役割をはたすのである。そしてこの時期に母親にじゅうぶんに依存することを学ばなかった子どもは、次の時期に母親からじゅうぶんに独立することができなくなる。のみならず、母親との正常な関係を保てなかった子どもは、情緒的にも不安定になったり、人間関係に自信がなくなり、また他人とうちとけた関係をもつことができなくなる。

従来、小さいときに親が子どもを甘やかすと親に対する信頼心が強くなると考えられてきたが、むしろ親がじゅうぶんに愛情をあたえ、面倒をみることでできなかった方が、後にいろいろの問題を生じている。そして、幼稚園時代に信頼心の強い子どもがかならずしも甘やかされた子どもであるとは限らない。むしろいろいろの事情でじゅうぶんに親に依存することができなかった場合に、いつまでも信頼心の強い子どもになる傾向がある。

さて、第四の時期は、幼児期である。この期は独立、協力時代であり、年令では三才から七才くらいまでである。この時期には、子どもは一応親の手からはなれて、他のおとなとともに生活できるようになる。他方、子どもはおとなと協力してゆくことができるようになる。力だめしの時期を経て、子どもはおとなに期待し、おとなに要求することがわかってくる。そしてそのおとなの範囲も、家庭から外に拡大してゆく。

しかしその初期、また前段階からの移行期には、家庭外のおとなも、母親のような立場で接してゆくことによって、子どもはいっそう広い社会に安定した気持でいってゆくことができる。三才児の保育の場合には、とくにこの点が重要である。

さらに、この時期の子どもは、しだいにおとなと一しょに協力してあそんだり仕事をしたりすることができるようになる。子どもが自分の要求を通そうとするだけでなく、またおとなが一方的に命令するだけでもなくて、子どもとおとなが共通の目標をもって、話しあいながら仕事をすすめてゆくことができる。したがって、おとなは子どもの考えをいかし、またおとなの考えをも出すことによつて、子どもだけではゆきづまってしまうところを打開して、あそびや仕事を発展させてゆくことができる。この時期の教育計画では、このようなおとなと子どもとの関係を基本にして考えることが必要である。

次に、第五の時期には、おとなと子どもとの関係が減少して、子ども仲間がもっと大きな位置を占めるようになる。仲間時代である。年令からいえば、八、九才から上である。幼児期から子ども同士の関係はましてくるが、この時期になって頂点に達する。したがってこの時期には、子ども同志の関係をもっとも有効に生かして教育計画を立てることが必要である。

幼児期の前後の発達を考えて、とくに幼児期におけるおとなとの関係を考えてみたのであるが、教育計画との関係を要約してみるならば、次のような点を指摘することができる。

一、幼児は母親からはなれても、おとなに基本的に依存しているという安心感をもつことが必要である。

二、子どもはおとなからはなれて、自分で考え、判断してゆくようにしむけることが必要である。

三、困ったときなどに、おとなの協力を求められるような関係が成立していることが必要である。

四、おとなは子どもの考えをいかしながら、話しあって計画をすすめてゆくことが必要である。

二、子どもの意図的な行動の発達

教育計画と関係の深い発達側面の第二の点は、子どもの意図的な行動がどのようにして発達するかということである。その発達程度によって、子どもがおとなにはたらきかける態度が違ってくるからである。

第一の時期は子どもが明確な意図をもたない断片的な活動の時期である。それは大たい三才から三才半くらいまでの年齢である。

三才児を保育して、四、五才児に比べて気がつく特長は、子ども

がよく動きまわることであろう。彼らはいまこのことをしていたかと思うと、次の瞬間には別のことをしている。いましていることと、次にすることとの間に関連性がないのである。たとえば、積木をやっている蝶がくるとそれを追いかけて、そこで石につまずくと今度はその石であそぶという場合である。つまり行動がひとつひとつ断片的である。絵をかく場合にも、はじめから何をかこうと意図をもってかくのではなく、かいているうちに、人になったり家になったりする。意図はあとから生れるのである。

このような時期を経て、子どもはしだいに意図をもち、その意図にむかって行動をおこすようになる。しかし意図をもった活動も最初は自分ひとりの活動が多い。この段階では、まわりのおとなは、子どもが意図をもって追求することを許してやり、それを承認してやることによって、子どもの意図的な行動が発達してゆく。

さらに次の段階になると、子どもは他人と共通の意図や目標をもって活動するようになる。たとえば共同製作の場合も、二、三人でひとつのでき上りを頭に描いて、おたがい仕事を分担する。ごっこ遊びでも、その中で役割はいろいろあっても、共通の目標をもって参加するようになる。

このように数人で共通の目標をもつ活動は、幼児期には完成されないが、幼児期にすでにその芽ばえはみられる。それがさらに高度

に発達するのは小学校になってからである。

教育計画の上から考えるならば、周囲のおとなが、子ども自身で意図をもち目標をもって活動できるようにしむけ、そのような環境をつくってやることが重要になる。子どもは一度経験したことを、次の機会には自分で試みるようになるので、いろいろの経験をするように、教師が一しょにあそび、また環境を豊富にすることが必要なことである。さらにすすんでは、子どもの意図を理解することをつとめ、適切なところに教師の意図をさだめて、子どもが他人の意図をも理解してゆけるようにすることが必要である。

三、時間意識の発達

教育計画は、子どもがどれだけ将来のみとおしをもって行動できるかということと関係深い。しかし時間意識の発達はきわめて徐々であって、成人期にいたるまで少しずつ発達しつづける。

乳児期や幼児初期には、子どもには過去も未来もなく、子どもはまったくそのときの瞬間に生きている。以前にやったことに強く固執することもなく、また将来のめあてもない。このことは意図的行動の発達にもみられたことである。

次にあらわれるのは未来である。「きのう」ということばよりも、「あした」ということばの方が先にあらわれる。お話の内容でも、

「きのうこうした」ということよりも、「あしたこうしよう」という方が幼児には強い関心がある。こうしてさらに進むと、「いましているこのつづきを、あしたしよう」というように、あしたやることまで考えることができるようになる。五才の終りころには三日から一週聞くらいのも然とした時間の中を意識して、活動することができるようになる。

このことを教育計画と結びつけて考えるならば、幼児期には時間意識が芽ばえる時期であって、ふじゅうぶんではあるが、しだいに、今日やること、あしたやること、きのうしたことの間に関連をもたせることができるようになり、したがってしだいにそのような方向にしむけてゆくことが必要なのである。

以上、発達の三つの側面について、教育計画との関係をみたのであるが、幼児期の発達段階を考えると、子どもが自分の意図をもち、他人と共通の目標をもって活動できるようにすること、きのうしたこと、今日すること、あしたすることが関連をもってゆくこと、そして教師と子どもがともに参加して教育計画をすすめてゆくことが、教育計画の上に必要なことになる。

それではこのような教育計画はどのようにして実際になされるのであろうか。次にその点を主として考えてみよう。(つづく)

* * *

世界一長寿の国デンマーク

戸倉ハル

今年七月十五日から一週間、ロンドンにおいて世界女子体育会議があり、それに出席するために、六月二十一日午前十時、北極まわりの飛行機でたちました。

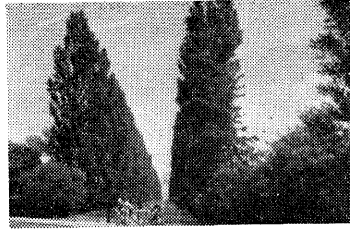
北極ははじめてのこととて非常な期待をもっていきました。飛行機は北海道を横に見てぐんぐん北に進んでいきます。十時間たっても日がくれません。うとうととまどろんでいると、「グッドモーニング」といわれ、おめざめのジュースとコーヒーが運ばれてきました。土地時間の午前四時、給油のためにアラスカのアンカレッジにおりました。風は肌をつんざく寒さでしたが、珍らしくこごえたような立藤の花が咲いていたのは驚きました。あたりには大きな立木がちっともなく、わずかに灌木があるだけです。四十分の後、再び機上の人となって、これから北極圏に入るわけです。

空は茜色に染まり、やがて右の空に朝日があかあかと昇って、左手に有明の月がぼんやり残っておりました。考えてみれば、北極でも白夜といって、とつぶり日が暮れないほどですから、北極では当然のことなのです。月と太陽とを同時に見て、これが現実

の私だろうかと思つてみたり、おとぎの私ではないかと思つたりしました。まったく、不思議な光景の中になお不思議に思いました。下を見おろすと、淡青い平原が白銅色の平地に連なり、それがしだいに白雪を帯びてゆきます。北極のただ中を通っている私は、下には白熊がいるかと思つて凝視をしましたが、三千五、六百呎の高さとして見えようはすもありません。ただ山々が、テントを張りつめたように雪に埋れてしすまりかえておりました。ところどころに黒い糸をひいたように見えたのは、氷の割れ目ではないかと思われれます。やがて青い海の中に巉巉たる島山が見え始めました。それはスカンディナヴィア半島でした。羽田以来、実に三十時間を費しておりますが、墜ちると露と消えることとて緊張して乗っていたので、腰の痛さも覚えませんでした。そのままコペンハーゲンの地上の人となって大きく伸びをしました。

ここデンマークは、東京の三月頃の気候で、みんなオーヴァーヤスウェーターを着ておりましたが、私どもは真夏の日本から真夏のロンドンに行くとして、すべて夏仕度で出発いたしましたのでぶるぶるふるえました。それでできるだけ下着を重ねて、その上

に、ロンドンのために用意した長袖の礼服を着用しなければなりません。この町は一面緑に覆われ、この寒さにめげずに薔薇の花が満開であったことが、また思いがけない風景の一つでした。



緑の街コペンハーゲン

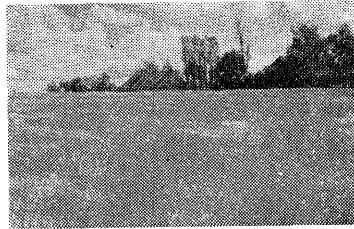
者で翻訳もなざり、漢字を三千字知っているから、書物は何でも読めるといばっていました。話しことばはてにをはがぬけたりアクセントがおかしかったりでお愛嬌でした。

ちょうど夏至の日で、この国の大学の卒業の日の面白い風習に出遭いました。それは、今年卒業した男女の学生が、今日の日が学生生活の最後の日というので、車に乗って、メガフォンを使って大声で歌ったり、少し広い通りにきてはおりてダンスをしたり、できるだけの馬鹿騒ぎをしますが、一般大衆が喜んで学生最後の馬鹿騒ぎを見ているのです。「踊る阿呆に見る阿呆」という歌があります。まったくその文句通りの風景で、私は踊りませんでしたので、損をしたような気がします。

こちらからの紹介によって、ステ

イーマンさんという七十歳の婦人が案内してくださいました。まず、コペンハーゲンの駅の食堂で昼の食事をしましたところ、私どもは旅の疲れか定食がやつとのことでしたが、ステイーマンさんは別に三品も注文し、およそ私どもの三倍の量をたいらげたと思われる健淡さに驚きました。何とこのかたは源氏物語の研究

こんなに寒いのに、学校はすでに夏休みになっているのがおかしく感じられました。学生たちは海山に遊び、子どもたちが父兄にとまなわれて、山のしたく、海のしたくでかける姿をところどころで見かけるほかは、子どもの姿を見ることができませんでした。



農家と麦畑

ここは農業の国なので、農村の発達は世界一といわれております。わらぶき屋根がところどころにあるのが目について、日本の光景に似かよっていることを嬉しく思いました。山のちっともない農村を通ってみますと、ただひろびろと畑にいて、麦が豊かにみのつておりましたが、ところどころに針金のような麦が十粒ほどの麦をみのらせ、ポピーの花などをその中に咲かせているのを見て、どんなに無精な百姓が作ったのだらうかと思つたことでした。あとで聞いてみると、作り切れないので手の入れようが限りでした。

片田舎のオーレラップには、有名なニールスブックの学校があります。汽車やバス、それに船に乗ったりしていくこととて、途中で原野の広大なことをつぶさに見ることができました。私は、先年この学校へいくためにコペンハーゲンの駅の果物屋で買物をして、ハンドバッグを店先に置いたまま汽車に乗りました。乗っ

てから忘れたことに気がついて、驚いてその店に帰ってみると、時間は三十分を経過していましたのに、私の置いたところにそのままありました。その後泊ったブックの学校の私の部屋には鍵がないので不安に思ってお聞きすると、学校中一つも鍵をかけないとのことで、一段と羨しさを感じました。バスの切符を売る窓口には、遠のりのこととて三十名位の列の後尾に並んでいました。が、一人ずつ静かに買っては静かに行き、日本のようにひしめき合わない整然さに魅了されました。この一事でもおわかりのように、デンマークの人々はゆっくりとして、ゆたかで、のんびりしています。何と女中さんでも一月一万六、七千円の俸給をもらうそうです。

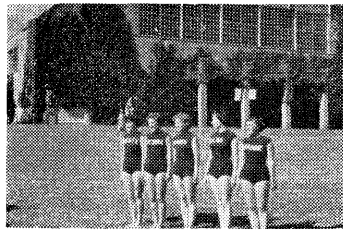


コペンハーゲンの街

町には信号がなく、自動車は人先に通して、あとから通っていきませんが、やはり東京のように信号による方が安心して通れるような気がしました。

先年わが国にもこられたニールスブックの学校は、主として社会体育に貢献しております。一年に千二百人の男女の学生を世に送り、そのほか長きは一年から、半年、三か月の体育の講会をしております。ちょうど私どもがまいりましたときは三か月の男女の講習会がありました。私は、一晩この学校に泊って学生と起居をともしました。七時起床、七時半朝食に続いて、その日は次のような日課によって、かなり充実した授業がありました。

- | | |
|------------------|---------|
| 八時—九時 | 文学 |
| 九時—十時 | 教授法 |
| 十時—十一時 | 生理、解剖 |
| この間に水泳をする人もあります。 | |
| 一 時—二 時 | はたおり、手芸 |
| 二 時—三 時 | 国語 |
| 三 時—六 時 | 体操 |



ブックの学校の学生

こうして養われるかたちは、各町村から送られてきておりますので、帰っていきけばそれぞれ地域のリーダーとなるわけです。各町村には体育設備が整っており、みんなが体育すべきだという観念が植えつけられており、適当な時間をさいて体育することが常識となっているということです。農村の体育は、夜八時から九時頃までにおこなわれます。富んだ村では大きなグラウンドを持つものもあり、主として、水泳、自転車、キャンプ、中跳、三段跳、徒歩、円盤投、やり投、体操がおこなわれ、若い人は、この中から三種目を選択して体力検定をおこない、それぞれに金、銀、銅のメダルが与えられます。夏は、多くの人が自転車旅行を楽しんでいることです。この国の平均寿命は六十七・七歳で世界最高を誇っています。ステイマンさんの健康健啖を思いあわせて楽しんでました。

第六回全国保育大研究会を顧みて

副 島 ハ マ

第六回全国保育大研究会は厚生省、福井県、敦賀市ならびに全国、福井県、敦賀市の各社会福祉協議会が主催し、報道関係、商工会議所などの協賛を得て、去る八月二十日から三日間敦賀市で盛大に開かれました。

この大会開催の趣旨は、実際に保育の場に立つ保母をはじめ関係者が、保育内容を中心に研究討議して、児童福祉法の制定以來発展してきた保育所のより一層の向上と、保育技術の練磨をはかり、それによって、大きく保育事業の改善向上に寄与しようとするもので、全国各地から集まった保母を主体として熱心な討議がくりひろげられました。

大会第一日は午前九時三十分開会に続いて十一時から総会が開かれ、研究発表と記念品の授与がおこなわれました。

この総会での研究発表は、八ブロックから各一人、地元福井県から一人と東京から

一人の合計十人によっておこなわれ、「農村保育所は果して不必要か」と題して成宮カツエさん（滋賀県）、「現在の給食費でおこなっている栄養の実態について」と題して竹之熊美佐さん（熊本県）、「保育所におけるつげ口の問題」と題して齊藤節子さん（宮城県）、「幼児画と保育のすがた」と題して永田久恵さん（静岡県）、「雪の観察及び操作、創作など」と題して福島順子さん（石川県）、「保育園における集団指導についての試み」と題して戸倉百合子さん（福井県）、「保育計画の作成について」と題して森恵美さん（徳島県）、「保育者の啓蒙を目的とした保育所運営について」と題して広瀬静枝さん（鳥取県）、「長野県保育園児の生活習慣実態調査についての一考察」と題して林五十鈴さん（長野県）、「保育所保母の研究活動における諸問題」と題して新井正子さん（東京都）がそれぞれ発表され、綿密な調査研究の結晶をうかがい知るとも

に、黒丸正四郎先生（大阪市立大学助教授）松村康平先生（お茶の水大学助教授）鯛子田繁雄先生（慶福育児会病院長）谷川貞夫先生（社会事業研究所長）の講評があり、意義深い総会を持つことができました。

成宮氏の研究は、農村の実態を数的に表わして農村における常設保育所の必要性を説いたもので、その周到な調査と論旨には強くうたれるものがありました。また戸倉氏の研究は、集団指導というテーマが取り上げ方がよかったと思います。森氏の研究は、実に四年越し続いているもので、長期に亘る熱心な努力がみものっていましたし、竹之熊氏の研究は、給食についてのそれが、そのままそっくり役に立つという点でよかったと思います。その他いずれもその地方や地域の特色をだし、ことに東京都の保母の保育活動などは極めて自主的で、全国各地が参考とすべき諸問題を含んでいたと考えます。

ついで大会第二日は十分科会が午前九時から開かれ、全体のテーマ、「保育所の児童を心身ともに健やかに育成するために」を基として、第一分科会では「乳児保育」、乳児保育の実態について、健康に関する技術的な問題や乳児保育に関する記録の取り

方、基本的な生活習慣の問題、乳児用遊具に関する新工夫がとりあげられ討議されました。

第二分科会では「健康管理」健康保育計画とその内容をテーマとして、幼児の運動能力を如何に発達させるが、その指導法はどうするか、基本的習慣の養成の中、とくに健康保育上大切な手洗いの徹底をどのように指導するか、習慣づけの方法、肝油の服用、検便、予防接種の費用を免除或は公費負担にしてほしいなど、また、給食関係者の衛生管理の注意点、子どもの午睡のさせ方、伝染病児の取扱いかた等、多方面に亘って協議討論されました。

第三分科会では「給食」(一)、七円十銭での給食のありかた。(二)、給食を完全に実施する方策をテーマとして協議された結果、家庭よりいくらかの補助金を徴集する。私立の場合は施設長の負担とする。公立の場合は市町村費の負担とする。現物による寄附の協力。自家菜園。材料購入の工夫など補助方法がだされましたが、最後の申合せ事項として一、全国の保育所が一段と内容の充実した副食給食を実施すること。一、カード式献立表の研究と実践。一、金額国庫負担で栄養士を保育所主管課に配置する

ことなどが一致した意見でした。

第四分科会では「問題のある児童」問題のある児童の指導がテーマとされ、身体障害児、精神遅滞児とか、いわゆる問題をもつ幼児(集団に入らない子や集団を乱す子、爪かみや性的な問題等の習癖を持つ子など)の集団の中での問題などが熱心に討議されました。

第五分科会では「環境整備」(一)、保母の担当と組分けになつて。(二)、保育用具の工夫についてをテーマとして、人的、物的環境、混合組編成、保母の担当と組分けについて、家庭的雰囲気の必要性について、保育用具の工夫などが協議討論されました。

第六分科会では「自由あそび」、自主性、創造性、社会性を伸ばすための自由遊びと指導についてがテーマとされ、保育に欠ける乳幼児と言語、保育に欠ける乳幼児と音楽リズム、保育に欠ける乳幼児と絵画製作等が熱心に討議されました。

第七分科会では「保育計画」、保育計画とその指導についてをテーマとして、デスクプランの少い有意義な発表が多く展開されました。一日の保育の流れの中心をどこにおくとか、子どもの望ましいパーソナリティを養うにはどこに目標を置くかなど種

々質問が出て解決案がとりかわされました。

第八分科会では「保育に欠ける子どもとその家庭」、保育に欠ける児童の実態とその指導についてをテーマとして、「保育に欠ける」という意味の理解や、工場地帯、細民街、ダム工事地帯等の不良地域に育つ子どもの実態、そして学童保育、入所基準、定員などの諸問題が討議されました。

第九分科会では、「保母の生活」保母の生活態度はいかにあるべきかをテーマとして、保母の生活態度、職場の内部における保母の融和、保母の資質の向上、保母の待遇問題、保母の悩み(恋愛、災害など)、保母の組織について協議されました。

第十分科会では「保育所の運営及び管理」をテーマとして、保育所の運営及び管理の適正化について公立と私立との運営上の差異、受託児童が被害をこうむったときの設置、予備保母の常置、地域と保育所のつながりなどについて討議されました。大会第三日は午後九時から総会が開かれ、各分科会の報告や、大会主催者と参加者代表の所見が述べられて盛會裡に第六回大会の幕は閉じられました。

「とんびのえのぐ」と創造美育の考え方

林 健 造

一、日本の児童画のすばらしい成長

今年の夏、オランダのヘーグでおこなわれた、国際美術教育学会—インセア (Insea) —に出席した日本の代表から、最近報告がもたらされたが、その中で、日本からたずさえていった日本の子どもの絵が、各国から持ちよった作品と比べてすばらしい出来ばえで大いに賞讃されたこと、そして展覧するための選抜に一点もおとすことさえできないほど優秀であったというのである。

これはわが国にとつてはすばらしい朗報である。しかもつい最近インドが主催した世界の子どもの絵のコンクールにおいても、その最高の榮譽を獲得したのは日本の子どもの作品であったが、こんどのように各国の美術教

育のエキスパートが多数参加している権威ある学会、(しかもわが国にとつては因縁づきの……)で認められたことは何といつてもうれしいことである。

いわく因縁づきということとは、実は次のようなことがあったからである。

一九五一年、英国のプリストルでおこなわれたユネスコセミナーに戦後久しぶりで国際的な舞台に参加できた日本代表が、そのときたずさえていった日本の児童画がうけた批評は「ノー・クリエーション」創造性が無い」ということであった。

イギリス、アメリカ、カナダ、西ドイツなどの進歩的な美術教育をおこなっている国々の児童画とはどうも違う歩みをしていること

にこのとき気づいたのである。その違いは、日本の児童画は「おとなっぽくて、悪達者で、子ども自体のいきいきした感動や創造性に欠けていたようで」「どうしてこんなにも早くおとなにしたいのか」と不審がられたとも

いわれている。それからあしかけ六年、「創造的な絵」「創造力を伸ばす美術教育者」をあのことばとして、進歩的な美術教育者はひたむきな努力を積みかさねてきた。創造美育はこのような機会から生まれくる運命を担っていた。今日では美術教育のいかなる場でも人も、創造力などということばは慣用語になっているが、当時は何か漠とした意味範囲のようでギコチないものであった。かくて今度ヘーグで拍した児童画について

の絶讃は、その間の教育成果が芽ぶいてきたものと思われ、その喜びも感激もひとしおのものがあるわけである。

もちろん、その榮譽はひとり「創美」が担うものなどという思い上った考え方はもたない。ただ、日本の児童画を、国際的な創造的な方向にむけることに創美の美術教育運動は少なからず功績があつたことは事実であらう

二、創造美術とは

さて、プリストルセミナルから日本の代表室靖氏が日本の児童画の創造力について手ぎびしい批判を受けて帰朝したのが昭和二十六年であるが、その頃数年前から栃木県で子どもの自由な創造性を伸ばすことを主張とする美術教育運動がおこなっていた美術評論家の久保貞次郎氏があり、一方名古屋で自分のメキシコにおける美術教育の体験をいかして新しい児童画教育に新方向を打出していた北川民次氏があつた。

これら三人の見解はまったく一致し、この三人を中心にして、賛同する進歩主義的な美

術教育者や学者、画家等の結集により昭和二十七年五月創造美術協会が誕生した。

その綱領には次のようにうたつてゐる。

○わたくしたちは子どもの創造力を尊び、美術を通して、それを健全に育てることを目的とする。

○わたくしたちは旧い教育をうち破り、新しい考え方と新しい方法を探究し、進歩した美術教育を確立する。

○わたくしたちはあらゆる権威から自由であり、日本と世界の同じ考え方のものと励まし協力しあう。

創美は教育の目的を創造力の育成におき、それを遂行する適切な手段として美術教育をおこなうといういわば従来の美術の教育ではなく美術を通しての教育と考えるわけで、すべての子どもたちは生れながらにして創造力をもっているという出発に立っている。

創美の教育方法の表看板としてゐる抑圧解放論とは、子どもたちが他から抑圧され、不当に干渉されることなく、自らの意欲によつ

て、自由に描いたり作られたりした作品は、きわめて創造的である。そしてこのような作品は美術的にもすぐれたものである、というのである。

したがって家庭の抑圧から解放してやることはもちろん、直接指導にあたる教師も従来のようにおとなの技法の注入などはつとめて、排斥されなければならない。教師の役割は、子どものよき相談相手となることと、環境を整備することであるといわれている。

それは、子どもたちに環境から加えられる抑圧をとり除き、精神を解放して自由な状態におき、その創造力を励ますことである。

このように自由な精神で描かれた絵は、子どもの心の投射であるから、そこには子どもどもの意識と無意識が表現されており、したがって適切な診断がおこなわれるならば、これらの子どもの絵を通して、その子どもたちのパーソナリティを理解することができるとともに、子ども自体にとつても絵を描くことは心の抑圧を吐きだし一種のカタルシス(感情の安全

弁)の役目を果しているものといえよう。従来の美術教育では考えられもしなかった絵やねんど工作などの感情表現を通してこれを精神衛生や治療に役立てガイダンスの問題として子どもの絵を新たな角度から取上げたことは特筆すべきことである。その診断の基礎はフロイトの精神分析学においている。

以上の考えかたから具体的に幼稚園や小学校の現場での実践の姿は、まずいきいきとした子どもの想像力による表現を強調するために写生画をしない。つとめてテーマ(題材)を与えないで好きな絵を好きなように描かせる。自分の好きなものを描くときは、その表現は確固とした定着を持つからである。そうして、何が描かれたかという問題よりも、どう描かれたかを重要な問題としている。すなわち、のびのびとして、創造的で、明るく、確固たる自信に満ちた、力動的な、しかも誠実感のこもった作品はのぞましい方向であり、概念的な、粗暴で、陰気で、無気力な絵はのぞましくないものとし、評価の基準を創

造力の表現におき、いわゆる指導要録の54321的評価に反対している。

以上を通して教えない指導がおこなわれるわけであるが、この教えないということは教師の直接的な技法指導をさしており、空はこの色でしようとか、バックをぬる方法はなどと教えこまないことを意味している。

三、創美のよさと欠けている点

創美の美術教育はいわば一つの民間運動であるが、この新鮮な進歩的な方向は、停滞していた当時の美術教育界に新風を送り、しかも民主的教育の線に沿って大きな発展をとげた。あのやりきれない酒瓶やリンゴの静物画と緑色を生でぬたつた木立ちと屋根瓦の風景画にとつて変って、子どもの生き生きとした生活経験や想像を描いた子どもらしい表現、大きな紙にのびのびと絵具でかいた幼児の絵、絶望視されていた中学生の迫力と誠実感のこもった絵はぞくぞくと各地に生まれ、前述のように数年を経ずして今や欧米諸国の水準に到達するにいたった功績は大きい。創

美は今年まで年々全国的なセミナーを開催してきた。年ごとに参加会員の数を増してきたが、そのセミナーの企画と運営は実にざん新で、ユーモアとサービス精神にみちていてすばらしい。赤や黄の色シャツや帽子をつけた会員たちが、誰にでも親しみをこめて握手し、歌を唄い、深夜まで討論しあう。その会自体まことに創造的で参加者は最初まったく戸迷うが、帰る頃には精神が完全に解放され、そこから若々しい意欲が燃えてくるというわけである。創造的な子どもを育てるためには、やはり教師自身が抑圧から解放され、創造的でなければならぬ。この点で教師の自己改造はたいせつなことである。

しかし反面、創美についての批判もきびしい。それは、人間の内部(精神)の解放と自由だけで創造的な人間は作られるかという問題である。ゲゼルの狼に育てられた少年にみられるように、環境の力は大きい。むしろ外界の刺戟とその対応においてこそ創造力は伸びていくのでむしろ外部の現実に対する正し

い認識が必要ではないかということや、絵だけの世界にとまらず広く子どももの造形表現のすべてについて考え、近代造形に対応できる造形感覚や技術を育てる角度からは、解放後の教育はどうするかという問題とともに批判されている。

しかしながらこれらのいずれの立場にせよ、創造的なものが根底になることは否めない。したがって、創美はプールに入る前のシヤワーである。といった言葉はけだし名言である。したがって幼稚や小学校低学年の美術教育の方法には全く創美の方法はふさわしく妥当なものである。そして次第に年齢が進むにつれて、よるこびの造形（遊び・本能的な衝動・無意識・偶然・抵抗排除）から考える造形（工夫・理性的活動・意識的計画的・抵抗を越えて）という方向を考慮されなければならぬのは当然であろう。

四、とんびのえのぐ

だいぶ理くつっぽいことを書いたが創美の仲間の早川智恵子氏の山の幼児の生活記録を

つづつた「とんびのえのぐ」という本について、実際の創美のやり方をみつめてみよう。

私はこの春、静岡の西日本図画工作教育大会で幼稚園の分科会の司会をしたが、百人からの教師の集りで、なかなか発言してもらえない。そこでまずこの緊張感を解きほぐすふん囲気作りから始めなければならぬ。こんなとき赤くなったり、青くなったりしないで、ごく自然に（多少勇敢に熱をこめて）、真剣な体験談を（島根弁を使ってユーモラスに）話してくれた女教師があり、彼女の発言により、参加者の緊張した表情はときほござれ、笑い声や、合槌をうつ声がかきこえるようになった。しかも彼女の発言は何ら権威ぶっていないから、みんなに安心感と仲間意識を与え、その分科会はその後活潑なのぞましい形のものとなった。その女教師が早川さんだったのである。

早川さんは、いわば創美型女史の典型である。服装も行動も発言もキビキビしている。ちょっと見はドライなアプレ娘を思わせる。

私どもは日頃しとやかさのかけにかくれている女だけを概念的に頭に入れていたからである。彼女の話をきいていくうちに、その話に魅せられ、ついには涙のどるほどの共感にうたれてしまう。

早川さんのように積極的、行動的であるのは、創美の教師の自己改造の洗礼をうけているからである。はつきり、お話ができるのは自己が確固としていて自信に満みているからで、精神がすっきりしているためである。

さて、この早川さんが島根県の一かからのクレオンすらもっていない、貧しい真砂まきさという山村の保育園の一年間の生活記録をまとめた本を出された。この本の内容を要約すれば、幼児本来の姿で生活させることによつて、創造力豊かな造型活動が生まれたという結論になるが、その実例の数々は、指導のアイデアのよさと、ユーモアと涙と愛情にみちあふれていて一息に読ませてしまう文章のうまさとでまとめている。

さて早川さんは十二月のはじめ、小雪のち

らつく日にこの遠い真砂という小さな山村のお寺の保育所に新しい保母として赴任する。

「都会もんじゃて」

村人も子どもたちも冷やかな眼をむける。

早川さんも田舎の生活自体を知らない。数日たったある日、一人の子どもがもじもじと汽車について尋ねる。私は汽車ののってきたと答えてやると急に子どもの眼は輝いてくる。

「そんなら、汽車の話をしてやんちやい」といいだし、取りつく島のない思いでいた早川さんはおよろこびで話してやる。

汽車ののって通ってきた空や、トンネルや、煙突のいっばいある工場の話をしてやる。子どもたちの体が動く。ついに一本の細びぎで汽車ごっこが始まる。

次に木炭屑でかくと何でもかけることを知らせると、彼らはまだ知らない汽車を描いてみる。石炭をたくこと、ポッポーということ、煙がいっぱいでること、子どもたちは次から次へと早川さんにきいては想像力をたくましくし、地面一ぱいに体全体で描きまわる。

共同でするしごとのたのしきも覚えた。翌日雨で園庭に描いた自分たちの絵が後かたもなぐ洗い流されたときの落胆のようすは「汽車は雨をのせていったんか」おおい雨やんでくれ」と雨空への絶叫となって読者の心をつつ。また「とんびにえのぐをもってきてくれ」とたのむ話は宮沢賢治の「風の又三郎」と実によく似ている。

早川さんはとほしい財布をはたいて絵具六色を三箱かってやる。模造紙を数枚並べて、九人ずつ交代で描く。待ってる組は「描きんちやい、描きんちやい」と綱引きの応援のように声援する。生れて始めて色で描き上げたすべての子どもたちの爆発するような感動と喜び。

雪がふれば、雪に顔をおしつけておたがいに顔が違うことを知り、「石ころがあれば石の絵を」と早川さんのすばらしい創造力と、熱意と泉のような愛情は、経済的にまずしい環境も、造形活動にとっては、実に恵まれた環境であることを如実に示してくれている。

環境を活かし、環境の不備を克服していくたくましい子ども、身の廻りから美しさやすばらしさを発見していく子どもに育てていく姿は、えのぐがなくなるとか、東京の子のよう便利な材料がなくてなどと嘆いている教師や、何をしたらよいかわからないという教師のために、早川さんのこの素朴な体験記録はよい道標となるであろう。

子どもと仲よしになる機会をたくみに生かし、想像力に挿さし、子どもの体感性を活かし、よき相談相手となってやりながら、一歩一歩と外界を認識させ、造形本能を多角度に伸ばしていく早川さんのやり方は、いかなれば創美の本質をいかななくいかし、しかもまたそれを越えて、新たな方向を素直な自然の状態でおこなっていったといえよう。

最後に、フィンガーペインティングの創始者ミス・ショーがいったという「本当に貧しいのはだれでしょう」ということばを、私もは心からもう一度味ってみる必要があるように思うのである。



園長雑感

太田 す え

園長雑感というよりも、園長愚感ということばが適切かとも思われる内容になることをおことわりして、私の思ったこと、感じたこと、現在経営している状態などにふれてみたいと思います。

八幡市といえば、八幡製鉄所を思いうかべられると思いますが、北九州工業都市の中心をなしているといえる重工業の都市八幡は洞海湾に沿うて、重工業会社工場がひしめきあっているわけですが、この工業地帯に三十ばかりの公私立幼稚園と、十四・五の保育園とで幼児教育をひきうけているわけです。その中で六つの公立幼稚園は、他に類のない公民館と併設のケースをとり、市の東部に大蔵、槻田、高見、北部に枝光、西部に熊西、黒崎と六つあるわけです。私の経営している大蔵幼稚園は、八幡の市中心部よりやや南東にあた

る大蔵谷の一带、枝光区一部を地域環境として、煙の工場からは離れたた地型で、自然にも人為的にも申し分のない環境にあるといえると思います。

○幼児教育において最も大切なもの

私は幼児教育において最も大切なことは何かということを考え及ぼすとき、それはまず教師と、施設設備と、地域環境即社会環境、この三つが充分であるとき、立派な幼児が幼児として育つのではないかと私なりの考えをもつものであります。

○地域社会とのつながり

大蔵の幼児はこの自然に恵まれた地域環境の中で、一日一日をいかに育ちいかに過しているだろうか。地方の幼稚園は今後地域社会とのつながりを持ち、幼稚園は母親学園ともなって、地域社会の婦人たちとつながりを持

ちつつ教育にあたるのが大切ではないでしょうか。地域の人々からも愛され理解されれば幼児教育の成果をあげることはできないのではないのでしょうか。地域社会の厚生、文化、とくに母親についての社会教育活動の中心となつて、地域社会のための大きな教育活動を展開する場となることを忘れてはいけません。

こういった意味から八幡市の公民館と幼稚園の併設は、物心両面からあいまって、足らざるを補い、協力しつつ経営しているわけで、たとえば公民館行事の衛生的諸行事面（映画、幻灯、童話、劇化、紙芝居）ともつながりもち、地区民の衛生思想をたかめる一方また幼児を楽しい雰囲気の中で保育しているともいえます。（結核予防週間のと きなど、幼稚園と公民館との合同行事で、九大医学部の先生の指導による映画のごとき母親指導がなされ、園医の先生よりは幼児に結核予防を童話によってなされる等多角形的連携を保ちながら社会教育と幼児教育とがこの併設の場においておし進められているといえます。また公民館に用件をもつ人で開館十時までに間があると、幼稚園児の行動なり教師の遊びの指導

等見学して、ほぼ笑んでいる状態などよく見かけます。こうしたとき、何も知らない幼稚園教育について、理解され、公民館に出入する人々とも、園長も先生方も親しみをもち、時にふれ折にふれことばも交されて、幼児期の教育の重要なことなどよく理解していただいています。

○幼児教育と母親教育とは平行に推進されねばならぬ

また二学期からの公民館講座では、こどもの心理という題目のもとに、大蔵一帯の母親が受講されていますが、これ等幼稚園児の母親が大部分を占めていて、私の希う母親学級が十週間にわたって行なわれるわけですが、こういった面にもたいへん幸せるわけです。幼児教育は幼児だけを教育すればこと足りるというのでなく、幼児と母親の平行教育がなされねばならない。幼稚園での教育が家庭の中まで浸透していくわけで、この点からもお母さん方の公民館における勉強は幼稚園にとってはプラスになるわけです。また幼稚園自体でも毎月一回母親の会をもち、この会には講師を招待して少しでも母親の幼児に対する理解を深め幼稚園教育に協力する事を願って

密接なる連携をとっているわけです。各月における母の会及びこれにつながる行事をひろって見ると下の表の様になります。

○父の会も必要

このほか六月と九月に父の会を致し、母親だけが理解しても父親の理解なくしてはとの声もあり、また理事会などでお父さんがたがときには父親も集めて幼稚園における子どもの状態を見せてほしいといった声もあったので、こうした試みをしてみました。九月八日のお父さん方の会はお月見の会のときでしたので、子どもたちも夕方から登園して楽しいひとときを過しました。こうして幼児はだんだん理解されて、ある母親は、先生この頃あまり子どもを叱らなくなりましたと申してきました。ちょっとしたことでも父親に叱られて、おきゅうまで焼かれたことのある子どもは入園以来あまり先生にもなじまず、先生に笑いかけることなどなかったのに、二学期になって顔色がいきいきして明るくなってきました。これなどは父親の会をもってから急に変わってきたと思います。このように幼稚園で先生だけが愛情の全部をそそいでも、

月	日	題目
四	六	母の会準備会 (地区委員を もぎめる)
四	一	入園式
四	二五	幼児画について
五	二三	健康教育の面から(身体検査の 結果についての所感)
六	二五	幼児の社会性について
七	一九	保育の心理 (連合後援会母の会でできく)
八	三	寄生虫について (幼児が健康に育つには)
八	三一	幼児教育懇談会
九	一八	子供の問題(両親教育) (自分ほそれをもと考えて処置しているか)
九	三	こどもの心理
九	一〇	九月三日開講式で一週に一回十 週間にわたって受講
九	一七	費用は公民館が主体となって持 って頂きますが、大蔵幼稚園母の 会研修費からも負担致します。
九	二四	
九	一	
九	八	
一〇	一五	
一〇	二二	
一〇	二九	
一一	五	
一一	二五	演題未定
一一	二五	幼児の生活指導(未定) 連合母の会、高見幼稚園に於て

一 二	一六 一六	子供を幸せにするには 梶田幼稚園に於て(東部三園連 合母の会)
二 三	二二 二三	保育参観(教育懇談会)
二 五	二五 二五	未定
二 五	二五 二五	幼小連絡について (一年入学心構え)

家庭環境が、両親が、協力していただけなかつたらどうしても子どもの状態は好転しないでしょう。幸にして父の会は大へんプラスしたことを私達は話しあっています。

私は幼稚園教育において最も大切なことを三つ申しましたが、これは私の過去五年間の体験で強く感じたことなのです。一年一年増すごとに施設の充実をみると、幼児もまた年年に豊かな情緒のもとに育まれていることはいなめない現実なのです。もちろんこの中であずかって力あるのは教師のあふれるごとき愛情とたゆまざる努力によるものと、園長として心から感謝いたしておりますが、また一面市長さんの幼児教育に理解深き面、教育委員会の方々の御指導の賜等何もかもが打ちそろって、今日の状態まで立ちいたることができたのです。でももう一つここいいうなれば地域社会の援助、これだけは私の園ではみのがせない事実なのです。もちろん園児の両

親は後援会加入をして、毎月会費納入をしていただいています。過去三年にわたって地域の有志の方々が賛助会員になっていただいて、物心両面の援助をいただいたわけです。婦人会からはまた設備の面に援助を仰ぎ、本年度は鯉のぼりの一揃を購入していただくし、卒業入園に際してはお祝をいたなど、幼児は地域社会の中の愛情に育っているといえましょう。

○一日遊びの生活の調査

また幼児の一日の生活を調査してまとめて見ました。これによりますと、幼児は遊びの時間はほとんど戸外で遊んでいます。この遊びの場の調査をしたところが、自宅の近所や、友達の家、小公園、其の他ひろっぱ、神社境内といったところで、じゅうぶん種々の遊びをして楽しんでおり、とくに夏は暑いせいか夕食後のひとときまで、外でいろんなあそびをして涼味を味わっています。

○地域社会は幼児の育つ温床

このように幼児の社会は広範囲にわたる生活の分野がある。幼児の住む地域環境において幼児は日毎に育っているといっても言いすぎではないと思います。こうした観点からも

幼児の住む地域こそ、幼児を教育する温かい教育の場なくてはならない。幼児の育つ温床であってほしいといいたいです。

○地域社会のもつ使命は重大

この点から地域社会のもつ使命は重大であると思います。だからこそ幼稚園は地域社会とのつながりが最も大切で、幼児もまた幼児なみの知識をあたえ、理解するよう、地域社会の一員として協力できるような指導してやらねばならないと思います。

要するに八幡のこうした施設の特異性を私どもは大いに有効かつ適切に使用してこの妙味をうまくいかし、人と人との和によってこの同一建物の公民館幼稚園の併設をうまくいかしていくような努力が必要だと思ひます。この稿をおわるに当り、この大蔵谷、秋雨につつまれた夜半に虫の音のすだくと共に心の中で私もおくすだきつぶやきぬ。

(八幡市立大蔵幼稚園長)

× × ×

イギリスに渡る

平井信義

(一)

ドーヴァー海峡を渡る船旅を、楽しく想像していた私には、実際には非常に苦しい十数時間になってしまった。

ベルギーの西海岸オーストエンドから船に乗りこんたのであるが、港を出るところから北風が強く船に吹きあて、しだいに波が荒れてくると、船の動揺ははげしくなった。甲板に椅子をだして坐っていた人たちも、波のしぶきを受けて椅子を後退させたので、甲板は足の踏み場もないくらいにぎっしりと詰ってしまった。船室へ下りていった人も「そこには席がまるでない」と指をならしながら帰ってきた。

私の隣にはドイツ人の母親と小学一年生くらいの子どもが坐っていたが、話を交さないうちに子どもが船酔いに苦しみ始め、それを介抱している母親も、まもなく苦しみはじめた。そこそこでどうよいうな状態が起ると、私もあやしくなってきたが、目をつぶっては日

本に帰ってからの仕事の計画を楽しく頭に描くよう努力して、かろうじてもちこたえた。

午後二時半に出航した船は、ロンドン郊外の港に六時半にはつくり子定であったが、風のために、大部遅延しているという話が、隣りや後で囁かれた。七時すぎ、右手にイギリスの山々を薄黒く眺め、点々と灯る光を見て、ほっと安どはしたが、いっこうに港につく気配がない。「何時頃につく予定でしょうか？」と背後の女の人が、ちよほど乗合せたボーイにたずねたが「船長だけが知っていることです」と答えたまま、忙しそうにいつてしまった。その女の人は肩をすくめてから、ジャケツの前をかき合せた。しかし、顔の表情をとくにかえないのがどうしたことかと訝った。

日はとつぷりくれて、星の輝きが飛び散るようであったが、風は一向におさまらない。寒さはしだいに骨身にしみてくる。食べ物ももはや売っていない。水ものもない。空腹と寒さの一人旅は、じつに

心淋しい。いつ着くともわからない船の上である。着いたとしても真夜中のロンドンに何が待っているだろうか。八時、九時、十一時と過ぎていったが、船は港に着けないでいる。私はいらいらした。腹がたってきた。

ところが、廻りにささやきあって坐っている人を見ると、腹を立てているのは、自分ばかりではないかと訝かしく思わざるをえなかった。みな、じつとうずくまり、寒くなると椅子から立って足踏みをしている。それをくりかえしているのである。アナウンス一つもない。ボーイにきいてもわからないという。そうした不安定な状態になると、恐らく、わが国であつたら、たちまち怒号が湧き起るだろう。船長や船員を詰問するだろう。早く何とかしろと叫び、あるいは不満を船会社に向けてなじり合う声がかれるだろう。ところがこの船の中では、到着時刻を五時間以上も過ぎて夜の十二時を廻っているのに、何ごとも起らないのである。どの人も、私とどうように、ほとんど飲まず食わずである。船はあい変らず大きく揺れている。イギリスの灯をちらちら見ながら、港につけないのである。それなのに、寒さをさげるために自分を守る行動しかとらない人たち。神に自分の体をまかしてしまっているのだからか。社会的な訓練がいきとどいているのだろうか。船長の人物を信じきっているのであろうか。私には理解できなかったけれど、私自身もそれらの人の態度にさそわれて、椅子にうずくまり、レインコートで寒さを防

ぎながら、しかし、しだいに気持がおちついてくるのを感じていた。午前二時すぎ、ようやく、船は波止場についた。疲れた顔つきの人々が、ほっとしたような明るい目の色を示し合つて、たち上がった。しかし、われ先と争つて降りようとする人は一人もない。荷物をかかえたまま一歩一歩と人の波にしがたつて、船の乗降口からクラップを降りていく。その波にしたがつて私も、イギリスの土をはじめ踏んだ。

その後、日本に帰つてからも、混んだ乗物や、不時の停車に会うたびに、このときの情景がいつもよみがえってくる。そのたびに、あの船の中でどうして騒ぎが起らなかったのか、じつに不思議な気持に打たれるのである。騒ぎ立てても、無駄であるばかりか、かえつて船長や船員の仕事を多くし、気持の負担を増すばかりであることを知っている。静かにして、船長に全責任を負わせた方が、自分の立場を守ることだと、知り抜いている。——私にはあのときの人の動きがそう思い返されてならなかった。何か事件が起ると騒ぎ立て、かえつてそのための混乱がひどくなる、この点に無神経な日本人なのではないか。子どもの教育のことについても、その点で、ずいぶんたくさん問題があるように思えてきた。

(二)

イギリスでは、モズレー病院の小児部(問題児の収容施設)を見学することと、精神衛生のクリニックを見学するのが楽しみであつ

たが、第一歩から、町の人々の動きに心をひかれてしまった。

知人をたずねるために、バンク・オヴ・イングランドの付近で地下鉄からだと、私は思わず足を止めたのである。ちょうど、昼下りであった。目の前にひらけたのは、トップハットやシルクハットの紳士である。モーニング、または黒服に、ステッキまたは雨傘を小脇にかかえ、手には新聞または白い手袋を握って、目の前の通りにも向う側の通りにもいるのではないか。しかも二人・三人というのではない。歩いてゐるほとんどの人たちが、そうしたいでたちなのである。私の前を何人もの紳士たちが通っていく。その紳士たちは、目をしばたきながら見つめてゐる東夷あづまびとの私などには、一べつもくれない。目的は全く一つ、それ以外には行動しないとでもいうように、右から左、左から右へと歩いていく。ドイツでは、じろじろと穴のあくほど眺められた東洋人であるが、ここでは、同類の人種とみられているのか、相手にされない人種なのか、……イギリスに長く滞在している友人は「しんは馬鹿にしているのだよ」と私に説明してくれたが、必ずしもそののみとは思えない。むしろ、私にはその紳士たちが何か苦しうにきどっているように見えて仕方がなかった。そして、それら紳士とゆき交うたびに、私の顔には微笑が湧いてきて仕方がなかった。イギリスでのこの微笑は、衛兵交替の儀式を見終えたあと、爆笑に変つてしまった。十時半から一時間余りのこの儀式は、毎日毎日くりかえされてゐるのである。それもただ事ではない。パッキンガ

ム宮殿の前に待ち構えてゐると、鉄格子を越して、中の衛兵の整列が始まる。その頃から、町の片隅に軍楽隊の吹奏が近づいてくる。

その後には騎馬隊・衛兵の列……。とにかく、たいへんな儀式である。すべてで百人以上の兵隊であろう。待ちかまえてゐる見物人が払いのけられると門があいて、一隊が中に入ると、交替の儀式。そして、任務を終えた兵隊が再びその門をでて、吹奏の音とともに、町の片隅に消えていく。その間一時間半。それぞれ目深く被った丈高い何とか帽、赤い服、黒光りのしている靴。——子どもたちならさぞ喜ぶだろう。眉一つ動かさないきまじめな顔、顔、顔。一条乱れぬ手や足のさばき、玩具の人形を見てゐると全く同じである。

最後の騎馬隊の後にそれぞれ散っていく見物人の波から離れると、私にはどつと笑いがこみあげてきて、歩きながら一人で「くっくっく」と、抑えてはこみ上げてくる笑いを、もはや止めることができなくなつてしまった。

どうして、ああした大衆とは無関係の表情や、態度をもつた人間を作ろうとするのだろうか。「行儀のよい紳士」それもよい。しかし、ああした形の中に、本当に人を思い遣る気持とか、どの人間にも暖い扱いが生れてくるであらうか。世界における最も上流の紳士。それはイギリスに多いかもしれない。しかし、ああしたイギリス人の顔のために冷たい扱いを受けた植民地ではなかつたらうか。いまだら、それをどうこう言おうとは思わぬ。

ロンドンでもスラム街といわれる東地区にいて道に迷い、地図をひろげていたときに、貧しい格好をした太っちょのおばさんが、近寄ってきて「どこへいこうとなさるのかね？」ときいてくれたことと思ひ合せるのである。私の行く先を告げると、下げ革の中から鉛筆を出して、地図の上に行く方をしるしてくれた。「ありがとう」と礼をいうと、自分の方から何回も「ありがとう、ありがとう」と言つて、二重顎の溝をさらに深く刻んだ。イギリスでほのぼのと暖い人の心に触れた二、三の思出の一つである。

ロンドンの滞在で、もう一つ忘れ得ぬ光景がある。それは、ロンドン塔の前に眺めるベンチの横で、十七、八の男の子と女の子が、姿もあらわに抱き合っている光景である。そのような光景は、ハイドパークではいっそう目立った。無表情の紳士に対する若いものたちの反抗であろうか。それとも新しい時代の世界的な流れが、ここにも実現しているのであらうか。

イギリスでも、青少年のふしだらな態度が歎かれている。私を案内した病院の若い医者、きれいに清掃してある応接室の床に、さかんに煙草の灰を落した。私が自分のポケットから出した紙で箱を折つて灰皿にしたとき、いあわせた五十がらみの医者は、しずかに若い医者にそれをすすめた。しかし、若い医者は、別に顔を赤らめるでもなかった。

節操のない青少年。それ以上に問題の青少年はこのイギリスにも多い。その点でイギリスのおとなたちは、それらの青少年を本来のイ

ギリス人ではないと言っていると聞いた。すなわち、イギリスに連れてきた他国民が問題を起しているのです、本来のイギリスの子どもはそのようなことはしないというのである。しかし、事實はどうもそうではないようである。実際に「バンク・オヴ・イングランドで見た紳士、衛兵交替の儀式——この二つの光景と、ハイドパークの若い人たちの情交の光景とは、何か深いつながりがあるように思えてならなかった。

青少年問題で悩んでいるのは、イギリスのみではない。西ドイツにおいても、フランス、イタリアにおいても、平和な国スイスやスカンジナビアの諸国においても、その増加が憂えられているのである。文明諸国に共通な現象であることを見逃してはならない。近代文明の影響をうけているわが国においても、その例に洩れないのである。けつして敗戦の影響のみではない。道徳教育の不足のみではない。むしろ、ドイツが指摘しているように、一つは暖い人間関係を阻もうとしている器械文明の影響であり、一つは早発化した青年期に身体教育と精神発達のパランスが欠けている点である。したがって、いままら道徳教育によって、もし徳目が掲げられるようになっても、それはむしろ効果のないことであるばかりか、かえつて若い人たちの反発にあつて、益々混乱を招くのではなからうか。

近代の器械文明の波の中で、いかに暖い人間関係を保つか、その点に集中して考えると、子ども青年期の早発化を防ぐことを考えるべきで、それが青少年の問題を解決する方法なのである。

幼児教育寸描

各地の短信から

—研究したいこと—

—困っている問題—

—感想・反省—

幼おきな児こととも

加藤 邦子

「せんせ、お早よう」「あーらお早ようTちゃん」「せんせ、これ
やっから」「まあきれいな！ Tちゃんのおうちに咲いたの」「せん
せつ、おはよう」「はいおはよう」「せんせー、おはようってば」
「あら、Hちゃん早くお靴ぬぎなさい。きれいでしよう、こんな大き
なドリヤね、Tちゃんもつけてきてくれたのよ」「おらいいだつてあ
るーっ。もっと大きいのあるよ」Hは口をとんがらして花瓶をもち
にゆく私の後を追ってくる。「いやだあ、わたしだよ」「ちがうよ
私がかこだったんだよ」「先生、Hちゃんつねるのーっ」「さあざ
あおりこうさんは一二の三で離れましょうね。一二の三」前から後
からスカートにしがみついていた子どもたちが一斉にはなれたが、
Hだけが手をはなさない。「あらHちゃん、おりこうさんでしょう、
お花がおれるからね」そういうとなおのことしがみついでくる。二
学期が始って半月、幼児たちは入園当時よりもずっと個性がはつき
りしてきて、各々に成長した姿である。じっくり構えて個人研究を
してみなければと思っていたMも、いつのまにかその横暴さを消し、
落着いてきた。呼んでも返事のできなかったAも、キャッキヤッと
ふざけまわるほどになった。かけ出しの私にとっては、その日一日
を暮すのがせい一ぱい。頭をしぼり、先輩の先生方におききなが
ら立てたカリキュラムにしたがって、保育が終ったあとの時間

は、日誌をつけ、次の日の準備をし終らないうちに五時になってしまふ。あつという間に一週間がすぎ、とうとう一学期を過ぎてしまった。この間子どもたちの問題をみつめて、どうにかしなくては、と思つているうちに彼らはどんどん変化していつてしまふ。一学期に二、三回私はHの家を訪問した。彼女の横暴さはじつに驚くほどであつた。ちよつと自分の氣にいらぬ事態になると、誰であろうとける、つねる、叩く、ついに手足をばたつかせて大声を出してあばれる。家族の方が「口でいってつたつて絶対かかねかんね」といいながら、私さえ怖くなるほどの声で叱りつけ、叩きつける。子どもの思いがおとなのそれを中心に判断されてひどくきびしくしつけられている。そのおとなの思ひも、この家の複雑な事情と深く結びついているようだ。父母は現在いなく、祖母がHとHの姉を育てていて、近所でも、生活上の問題や、今までの家庭事情から特別な目で見ても、普通な目にとりあつかつていないらしい。家族ひとりひとりの間も、近所の人々との間も、つつけば苦い水の出そうな關係だ。私は母の会合のとき、できるかぎりの対策を、そのおばあちゃんと協力してやつてみることに約束した。しかし長い間の習慣は容易に消えない。いくら幼稚園で氣を配つても、この人的条件が変えられるわけもなく、そこから生ずる精神的経済的不安定や不満は、家族ひとりひとりにゆがみを起させている。しかし他をおしのけてもしがみつこうとするHの意欲にはたじたとするが、その真剣な瞳の色は、何かを求め訴えている。私の手で、この何もできない手でも、心からできるだけのことをしてあげなくては、と思ふ。現在のままでは彼女の将来を思ふことは暗胆たる氣持である。ああ何とかくして、あのつぶらな瞳が、夢にもえて生々と輝くように。「教育」だけでは

解決できないけれども、その限界の中で、あの家族とともに苦しみ、ともに望みを見出しつつ、私は最善を尽したいと思ふ。
(幼稚園教諭・仙台)

早く字を覚える子どもを

どのように理解するか

長崎 祐子

「先生、まだ字を教えずによろしいのでしょうか。お隣の○○ちゃんは本などをとんどん一人で読みになるそうでございますが——」

「うちの子どもは、もう全部ひらがなを読みます。私ども別に教へませんが、どこからか覚えてまいりました」

面接のおりなどに、たびたびこのような話がでる。幼くして字を読めれば読めるほど、頭がよいと思つている母親がすくなくない。つまり、字を読み始めた時期の早い遅いによつて知能の程度をはかろうとしているようである。そのたびに「ふつう、心理学者は精神年齢が六歳六ヶ月にならなければ完全に読書の準備ができてるとはいえない、といつております。お子さんは精神年齢はもうそれ以上ですが、体力はなんといいつてもまだ四才児ですから、視力や神経系統の発達から考えると、むしろ字を教えることより、そのための基礎を作るといふお心づかいの方が必要と思ひますけれど」と読書のレイディネスについてもつて知っている知識を受け売りするのが常であつ

た。

しかし、就職して一年を経ると、この受け売り説に疑問を持たざるを得なくなつた。というのは、私のこの話をよそに、私の受持っている子どもたちは、六歳六ヶ月という年齢を待たず、ほとんど読み書きを始めているのである。これは何を意味するのであろうか。字を早く覚える子どもに問題があるのか、あるいは六歳六ヶ月という心理学者が示す数字に問題があるのであらうか。

この場合問題となることは、子どもの育つ環境である。私の扱っている子ども、すなわち中流階級の家にある子どもの場合にのみいわれることであるのか、一般に現在の子どものような傾向にあるのか。また、母親の教育に対する関心度、兄弟の有無、読書の心を促す事物の有無、読書以外に興味をひく事物の多少、身体的発達との度合、その他種々の条件が原因すると思われる。

次に、六歳六ヶ月という数を結論づけさせた対象となっている子どもは日本人ではないことである。したがって、環境も異っており、身体的発達もいくぶん異っているであろう。また、これらの研究がなされたのは何年か前のことであるから、現在の子どもの条件と一致するか否かは疑問である。残念ながら現在、とくに日本の子どもを専門的に研究した書物を手にすることができない。

このように、書物をそのまま現実の状態において考えるとき起る矛盾について、再考慮しなければならぬことを痛感するものである。

私は、現在の日本における幼児の読書の実態に触れ、地域別に前述の諸問題を考慮しつつ調べてみたいと思つている。そして年少組でありながら、すでに読書に積極性を示す子どもに対し、子どもの

成長を考えながら正しい指導ができるよう勉強してゆきたい。

(幼稚園教諭・東京)

K子ちゃんの経験を通して

毛利 倫子

六月のある日、電気のついた保育室で仕事をしていた私が、なにげなく子どもの作品を入れてある戸棚をあげて、キヤッー！と跳びのいてしまった。戸棚の奥に光る二つの目、動いている黒いもの、おそろおそろ電気を近づけてみると、そこに正体を現わしたのが昨日から行方不明の黒兎の仔だった。おびえる目、おなががすききっているとみえ元気がない。まもなく人參の葉を夢中で食べはじめた兎を見つめている私の頭の中には、四月からのK子ちゃんの行動がよみがえってきた。あくる日、いつものように登園したK子ちゃんに「昨日先生が仕事をしていたら、戸棚の中で、あけてください」と声が出たのよ。」と話しかけてみると、急に思い出したように手をうって「あっそうです。あのね。兎がどこかへ行くといけな」と思つて私が戸棚の中へしまつておいたのです。」と話しだした。「そう K子ちゃんしまつておいたの。でも兎さん、戸棚の中は苦しいからもう入れないでくださいって言つたわよ、可愛そうね。」というとうわかつたといった表情でうなずいていた。

三十年四月、二年保育児を受け持ったときのK子ちゃんの記録の一コマで、ここでK子ちゃんを紹介すると、家庭は両親、祖父母、叔

父、叔母、それに二歳になる弟、おとなの中で育ったとゆう以外、とくに問題もない。ただ出産のときに視神経を圧迫され、両眼麻痺、症腫孔散大症で明暗による瞳孔の調節がとれない。視力は年が小さいので正確につかめないが、左指四米右指二米とゆう診断書が提出されていた。最初はK子ちゃんを見る私の目も、眼が悪いとゆうところにあつたので、身仕度の全然できないのを手伝い、集るときは最前列に並ばせるようにしていた。けれど入園当初の緊張がとれると、気の向くままにどこへでも行ってしまふ放浪性がでてきた。都心地で公立小学校に併設されている幼稚園（当時中学校も一しょだった）、鉄筋三階建の校舎内を、K子ちゃんにはなんの拘束もなく、あるときは地下室をのぞき、あるときは二階三階屋上までも、衛生室といわず給食室といわず、校長室、中学の部屋と、ひとり歩き廻っていた。それぞれ級を担当して手一ぱいの幼稚園の先生がた、小学校、中学校、用務員、作業員のかたちまでが、みつけると私のところまで連れもどしてくれた。それも歩くだけでなく、目につくもの、興味のひかれるものをいたずらして歩き、いたるところ危険をとまなう環境なので、ある日の私の日誌にこんなことが記されていた。『此の頃私の神経の九十九%までがK子ちゃんにとられてゐる——と。

今でも忘れられないのは帰園のまぎわにK子ちゃんの姿が見えなかったとき、やっと集団生活に慣れたばかりの三十三人の子どもを放つてK子ちゃんを探しにとびださなければならぬ進退きわまつた私、そしてとつさに頭をかすめる悪い想像、手洗いの戸を片づけしから叩いてあけていった気持、たまたま一ヶ所あかなかったときのショック！

K子ちゃんが欠席したときは母親のことば通り、偽りなくほっとして忘れ物をしたような気持だった。

私の頭の中にはしだいにこんな疑問も起つてきた。このままこうしてK子ちゃんを普通児の中へ入れて教育していくこと自体、間違つてはいはしないだろうか。三十三人の子どもたちはみな私の愛情を独占したいのが心理で、私の気持は三十三人の上に平等におかれてゐる自信はあつてもK子ちゃんに手がかければ、不満を表明する子ども、さらに心ない親までもある。

私はK子ちゃんの行動の原因をつかもうと観察し記録し家庭とも密に連絡をとつた。そして教育相談にも母親とともにいった。知能テストの結果は鈴木ビネーで八十九とゆう指数がでた。記録を見せて相談すると、知能の遅れた子どもの特徴とまったく一致すること、そしてこの程度では精神薄弱児の施設では受け入れてくれないし、現在の実状としては、団体生活に適さなければ幼稚園をやめさせるか、御苦労でもそのままつづけて幼稚園で教育する以外方法はないでしようとの結論に接した。K子ちゃんは出産のとき、眼と同時に頭脳にも影響を受けて生れた不幸な子どもといえましよう。

私は二年間、K子ちゃん個人の教育とゆうことも大きな問題だったが、このような子どもを普通児の中に入れて教育していくとゆうことに、さらにもっと大きな問題があると思つた。団体生活に適応できないからといって登園を止めれば、K子ちゃんのように生れあわせた子どもはどうして教育されるのであろう。

私はそのとき当面の問題として次のような考えのもとに学級経営を続けるしかなかった。このような子どもに巡りあつたとゆうこの

級の環境を、より教育的に活用していけばよいのではないか。この級を小さい社会と考えれば、社会にはいろいろな形で不幸な人がいるとゆうことを子どもに知らせて、その不幸な人に同情する気持を養い、その人をおかばつとも仲良く生活するとゆう幼児経験を通して、将来社会人としての生活の中で、そのようなことが少しでも理解されればよいと。

こうして二年間の保育を終え、特殊学級は区内に一ヶ所でも三年生以上とゆうことなので、現在併設の小学校に入学したが、K子ちゃん本人にも、他の子どもにもプラスされる面は少ないといった状態である。特殊学級の増設が要求されている今日、K子ちゃんばかりでなく、いろいろなケースで不幸な幼児期の子どもを専門に教育する施設（幼稚園）を設けて、現場の教師の悩みと子どもを救ってほしいと願わずにはいられない。

ひらがながどうやら書いて、先生にお手紙がだせるようになりました。とゆう夏休みの母親からの便り、私には親と同じ気持ちで喜べないものが残っている。それはK子ちゃんがこのままはたして立派に成長していくのだろうか、とゆう不安が依然として私の心をくもらせるからです。

（幼稚園教諭・東京）

女性である幼稚園教諭の

立場から思う

岩崎里美

教育は、人間活動の一分野であるから、それがどのような年齢層を対象とする場合でも、その生活の基盤となっている家庭環境の理解が伴わなければ、充分な成果が望まれないことは論をまたないところであります。

かざられた家庭生活だけの体験、しかしそのゆえにこそ、その育ちの背景をそのままに持ちこむ幼児を対象とする幼稚園教育は、他のどの段階の教育の場におけるより家庭に対する深い理解が要求されるのはまた、当然であります。

私も幼児教育について専門的知識と技術を広く研究し教養を深め、たゆみない愛情と努力の精進を続けているのは、これも当然のことであります。

ところで、その研究、努力の角度と深さが前述の要求にこたえる方向に向けられ、程度が充分であるかといえ、それはかならずしも「そう」とはいえないと反省するのであります。

なぜなら今日、相当数の家庭は、これを構成している諸要素が複雑多岐であり、人々は頭の中の民主主義と、日常生活の中の封建性が不調和のままの生活を営んでいます、それがどのように幼児に影響を与えているか、またその影響を取りのぞくにはいかにすべきか、これらの点についての私どもの反省と、努力に欠けるところがある、と考えられるからであります。このような不安定な生活の中で、一番当惑し揺れているのが主婦すなわち母親たちではないでしょうか。

考え方が感情的で、自己中心から脱却できにくい女性の通有性。嫁、姑、小姑、あるいは子どもと継父母間のトラブル、夫婦の不和など、家族構成上の問題。社会的には経済的不安、女同志の噂話の

煩わしさなど、家庭の灯火である母親を困らせ暗くしている問題の何と多いことでしょうか。

以上のような理由から、これらの点についての正しい認識と洞察が幼児教育に必要とされるのでありますが、この仕事にたずさわる者の大多数は、このような問題に経験と関心の少い若い女性で占められているのも一つの問題点であります。

私どもは面接や、環境調査の資料などによって、幼児を取りまく条件はいちおう把握しているはずですが、しかしさらに、その奥にひそむ問題の核心をひきだし、あるいはその訴えに暖い理解と解決の手がかりを与え、ことに母親が広い視野と判断力を身につけて、豊かな情操を養い得るように援助する積極性と方策が、今の私どもに最も要請されるのではないのでしょうか。

それは同じく女性である私ども自身の問題としても。

幼児教育の前進を、はばんでいるものは何であるか——幼児教育の危機説、幼稚園無用論、男性教師導入論などの原因は、女性の勤労意欲の低さ、個々の園に根をはる古いしきたりや天性は——などなど検討の要はないか。

女性が自らの職場の進歩を妨げていることのないよう、冷静に考えてみましょう。まず私どもの人間的成長のためにも。

(幼稚園主任・名古屋)

保育室で思う

山本 光

1. 不安の表情 われかえるほど賑やかな担当の二年保育児の中でただひとり、今もって不安の表情の消えぬA子、常時脇裏を去らぬ問題児。A子の家は使用人数名の商店、母は非常に多忙のようすで一度も顔を見せない。入園半月後父親は私に言った。「A子は左ぎっちゃなんです。この前強制的に治そうとしたら急にどもりになっちゃって……。どもりより左の方が良いと思って止めたのですが、先生、右を使うようにどうかお願いします」と。この父はA子をとても可愛いがっているらしい。私はこの話しにA子がクレオンを持つとき、お弁当の箸を握るとき、私の顔をじっと悲しそうに見上げることに納得がいった。生来の内攻性であったらしいA子に、恐らくは入園を動機としておこなったであろう無理な矯正が、どんなにか大きな圧迫となって幼い心を傷けたであろうか。それが幼稚園全体に対して恐怖の観念となっているらしく思える。登園から帰りまで、絶えず心配そうにしてどんな間にも無言、遊びに誘ってもかたくなにこぼむ。出す声は、困ったときに「おえつ」に似た泣き声だけ。一学期間、私のいくところ、かげのようにしていることで、やっと安定を保っていたらしい。二学期になってからは友だちの遊びを傍観しているのであるが、相変らぬ無表情には不安のかげが去らない。一人だけどうにも浮かび上った存在なのである。私は父親

にあうたびに「不安のしこりをとって幼稚園生活を楽しませることが先決。それから後、左利きがいけないのではなくて両手利きにしましょう」と話す。園生活の中では、比較的好きな動きのリズムで、徐々に自信をつけさせたいと考えるが、大切な家庭の父よりも解つに貰いたい母が、とかくいいそがしい、いそがしいで話し合いにならず、まことに困っている。A子の幸せへの道がここで甚だ遠くなっているように思われる。

2. 公正な評価を。本年五月、園児の入園前と入園後の日常についての質問紙を、保護者に回答提出して頂いた後で、男児Bの熱心な母親から聞かれた。「調査表の質問の欄ですが入園後、Bの質問の数が少くなりましたが、そのような傾向は皆さんの標準の中でどのようなのでしょうか。」知能テストのように数字で解答を得たいようなBの母。この場合その質問が質的に深くなったものか、または外遊びを覚え友だちと遊ぶ時間が多くなり、その回数が少なくなったのかとも考えられ、調査表の項目を整理して得たパーセントの数字だけで答えられるものかどうか窮してしまつた。この例でなくとも多くの父母の方から、「うちの子どもは標準位なら良いと思うのですが」とばくぜんとした間で園生活の評価を求められる。その答がまたばくぜんとしてしまうとき、経験年数をいわずに浪費してきたように思えてゆきづまつてしまう。

子どもはそれぞれに違う。子どもをよく見、知り、広い資料から公正な評価をするということ。評価なしでは保育の向上もないのではないかと思うとき、その考え方や実際を知りたい。

(幼稚園教諭・東京)

自由保育のむずかしさ

島田みつ子

私は、経験一年半で、現在地方の小都市の幼稚園で二十七名の四歳児を受持つている。今日までの教師生活で比較的思うことをさせてもらえた私は、非常に恵まれている。学窓を出たとき、相当の理想を掲げていた。短大二年のときだったか「経済的にも、受持人数にもいろいろ困難のある幼稚園で、自由保育が可能か。」というような問題がだされたことがある。私はそのとき、確信をもって「可能である。」と答え、私なりの方法を論じていた。現代の幼児教育の方向からみても、自由保育でなければ、真に幼児の幸せは与えられない。幼児を抑圧から解放し、本当の要求を認めて、個別的に教育するには、どうしても心理的考慮を充分に施せる自由保育がなされるべきである。

そこまでは、教わつてもきたし、私自身よくわかる。しかし、二十七人を一人で持ち(その人数なら糞沢といわれるかもしれないが)、まるく座れば、身動きのとれないようなところである。室内には、子どもがいつでも欲するときにはできるよう、粘土も備えておきたい、材料棚も、ままごと、イーゼルも、読書をするところも、動植物の飼育も、また、ぼんやりしている子どものかくれ場所も設備したのである。その上、子どもたちは幼稚園の経済におかまいなく、画用紙も大きいものを喜び、布だ、ペンキだ、針金だと要求

する。それが与えられたときは、素晴らしい傑作もでき、子どもの創作力もぐんと上昇する。しかし、それがいつも許されるはずがない。お金のかからないもので、よい材料とよい設備はあるといっても、やはり考え込むのが現実ではないだろうか。

二十七人は、おのおの勝手なことをして遊びたがる。どうしても庭に出たい、どうしても積木をやめられない、「先生、ぼくの絵のお話きいてね。」といって、なかなか離してくれない。そのうちに、どこかでけんかが始まる。その喧嘩のグループは、特に別の部屋で話合つて、自分たちで解決させたいが、さてその間庭の監督は大丈夫だろうか、とまったく忙しくてやりきれない。みんなが仕事に熱中しているのにボツンととり残された子ども、その子に今声をかけ、気長に誘導するのに良いチャンスだが、製作の助言をせがまれば、それも捨てておけない。そうした中で記録もとりたいたい。

こんなことは、クラスだけで解決するのではなく、園全体が協力すべきだといわれるかもしれないが、私たちはできるかぎり力をあわせている。しかも手が足りないことは、環境設定と受持人数の問題ではなからうか。まったくの自由保育でない、コア型ということも知らないではない。が、何といつても、心理的、個別的に子どもをみていくには、今日の幼稚園のありかたに考慮すべき点があると思われる。とり残されたり、下積みになったりする子がないために、ひとりひとりを大切に扱う理想的な自由保育の方法をさらに深く研究することが必要である。

(幼稚園教諭・長野)

保育日誌をかえりみて

鈴木輝子

四月十日(うすぐもり)

朝からうすら寒い天気。母親に手を引かれた元気な子どもたちでホールはいっぱいになる。

はじめての勤めのためか不安が先にかけておちつかなかったが元気な子どもの顔を見ているうちに何かしら胸があつくようになってくるような思いがした。今日からこの子どもたちの良き友となることが出来るようにと祈る。

四月十一日(曇)

「先生おはよう」とカバンを自分のカバンかけに掛けるとすぐにプランコに乗りに行く子ども、

母親にしがみつき離れられない子ども、

「お家に帰るー」と泣きだす子どもでたいへんな騒ぎである。これらの子どもをやっとなだめて室に入れ、ほっとする。どの子どもも緊張した顔で私を見つめている。ひとりひとり名前を呼ぶごとに可愛い声で返事をする。ひとりの子どもだけが返事が出来ずにうつむいていた。

礼拝前お手洗いかせる。皆ばたばたかけだしていき、水道の前で手を洗いはじめた。どうしたのだろうと思っていると、手を洗い終わった子が「先生おしっこしてきてもいい？」と、私ははじめから

おしつこもふくめて「お手洗にいきましよう」と言ったのだがはじめから失敗である。

子どもの理解できることばで話さなければと反省させられる。

四月二二日(くもり)

子どもの表情も明るく元気になってきた。

今日は月曜日のためかおちつきがなくなりがしい。

礼拝のとき、サークルのまん中にひとりの子どもがとび出したら他の子どももまねをし、やつと静かになった。礼拝がめっちゃめっちゃになってしまった。

そのときの子どもの状態に応じたプログラムでなければと思う。

五月十日(晴)

ちようど入園より一ヶ月

今まで私のそばにばかりついていた子どもがひとり、ひとりと減り、子どもたちの遊びの中へ入ってゆく。はじめは返事もできなかつた子どもも先週より返事ができるようになってこちらが誘導してやれば遊びに加わり楽しそうである。

一造ちゃんと健司ちゃんは朝から一しよに積木をしたりすべり台に乗ったりしている。どうやらお友だちになつたらしい。

一造ちゃんはバスで通園している。

帰りにバス通園の子どもたちと一しよに停留所まで送っていった。ところがついてみると一造ちゃんの姿が見えない。方々捜したあげく、バス停留所のちかくにある健司ちゃんの家にいることがわかった。もうお友だちと道草することもおぼえたのだろうか。明日からこのようなことのないようにしなければならぬ。

もう二学期を迎えているが今までをふりかえってみると、入園の

ときは元気な子どもがあつたにしても何かしら不安なようすだった子どもたちが、この四ヶ月間にどの子も明るく笑顔でもって登園できようになつた。やつと幼稚園生活にも慣れて、これからそれぞれの個性を發揮するのだろう。

今まで小さなことながらいろいろ問題にであつたけれども、その場で解決されたものも今なお解決されない問題もあり、自己の足りなさを身にしみて感じるが私自身たえず新鮮な知識を吸収し、与えられた子どもに対して使命をまっとうしたいものと思つている。

(幼稚園教諭・仙台)

この頃思うこと

田中阿い

社会的に相当な働きをなされている方々の中に、幼稚園は贅沢な教育機関であるという考えを心の底に持ったお話を、しばしばききます。そんなとき、近くの場合には、「そんなに割切らないでください。」と注文しますが、遠くの場合は「幼稚園教育のみち今なおけわし」と推察して、この教育の仕事にたずさわる者たちひとりびとりの情熱をかきたてたいあせりさえ感じます。

九月中旬、東海地区の国公私立幼稚園合同で第六回東海幼稚園教育研究協議会が、長野県長野市において開かれましたが、その協議会の中にも、「幼稚園教育を向上させるために、地域社会との連絡をどのようにすべきか。」という問題がありました。自分のながい小

学校の教師時代には、特別にふれなかつた問題で、いまさらのように、義務教育という法の中にとめられた生活の、そうした面への苦勞の少なかつた教師時代が、なつかしくかえりみられました。そして、ただ子どもたちと、とつくむ生活に、とけこんでいけたことを思うと、幼稚園にもそんな時代が一日も早く訪れてくれたらよいかと願います。

地域社会の人々が幼稚園教育を理解して、望ましい幼稚園教育が、がっちり打ちたてられていくために、私たちの努力は、こつこつとたゆみなく各方面に、続けられていかねばなりません。自分をふりかえてみますと、二十余年の小学校の教師の、しかも主として低学年の生活にあけておりながら、その一つ幼ない段階の子どもたちの生活にとりこんでこんなにも真剣に悩み、苦勞して多くの教育者のあることを知らなかつた自分のうかつさを申しわけなかつたと思います。

この頃、幼稚園を、義務教育にすることが望ましい。とゆう意見をきかれるようになってきましたのは、就学前の教育の成果が、みとめられてきたしるしのようにも思えて、さあこれから、と心のしまる思いがします。

そこで幼稚園教育を義務教育とすることによって生ずる種々な問題が考えられてきます。その一つとして、就学前一年の子どもの集団生活へのとけこみ方と、小学校一年の子どもの集団生活へのとけこみ方と、それにもなう抵抗度がどうも幼稚園の場合の方が強いようにみうけられ、個人差でこぼこが幼ない時代ほど多いように思われます。たとえばいろいろな遊びをしたり、行事をしてみても幼稚園の場合の方が問題が生じます。とにかく現行の一年生の段階

を一年下に下げるといふような取扱いでなしに、幼稚園の年長組を義務教育とする場合の考慮は慎重になされてほしいと思ひ、また大勢の人々でこの問題を真剣に考えたいと思ひます。そして、制度の上からも安定した教育機関となり、何事につけても、義務教育でさえ充分にできないものを、ましてや幼稚園などは……などといわぬ日の訪れを、ひたすらに待望してやみません。(幼稚園長・静岡)

初心者の悩み

鈴木ノリ

「先生さようなら」と、保育中は手に負えない、いたずらをして暴れまわっていた子どもたちも、お帰りのときだけは素直になって、ピヨコンと、おじぎをして帰っていきます。

その後姿を見るにつけ、いつも心ざびしく思うことはYちゃんのこと。

Yちゃんが幼稚園に姿を見せなくなってから、もう二ヶ月になります。訪問すると「どうしても幼稚園にいきたがらなくて、どうも困ったものです。今まではそんなことはなかつたのですが、最近になってこんなことになってしまつて」というありさま。そうしてお家の方では幼稚園をやめさせるつもりでいるのです。

Yちゃんの家から幼稚園までは、子どもの足で四五十分はかかるでしょう。七月はじめまでは、そんなに遠くからも、平気で何ごともなく、元気に登園していたのに、どうして急にいやになつたのか

しら、いくら考えてもわかりません。

Yちゃんは口数のすくない、気の弱い、おとなしい子どもでした。あまりお友だちと遊ぼうとせず、だまって見ている方が多かったようです。それだけに幼稚園の生活になじみがたかったのでしょう。

また彼は私たち保育者を悩ます「絵を描きたがらない子ども」だったのです。お絵描きのときは、首を横に振って、頑としていません。それでも七月までに、二・三回は描いたでしょうか。そのときは、おもしろくないような顔をしながら、丸を描いたり、線をなぐり描きする程度、描かないときはだまって人の描いているのを見たり、いたずらをして歩くのです。

いずれにせよ、登園しなくなった原因は、まだはっきりつかんていせんが、ひとり子どもを途中から失ってしまったこととその子の心境を察することは残念で仕方ありません。そしてまた私の頭にごびりついて離れない、同じように絵を描きたがらない二・三の子どもの顔、いなかのことです。で入園するまでクレヨンなど手にする機会のすくなかった子どもにとって、クレヨンをもって自由に表現することはむずかしかったのでしょうか。Yちゃんも、その他の子も、それぞれ異った原因を持っているでしょう。しかしここでそれを取り上げることもできませんので省きますが、初心者第一におつかった悩みであり、問題です。原因を追求し、どうしたらこの子どもたちに楽しく、しかも自由にのびのびと表現させるかが、現在の私に課せられた研究題目であり、また今後も取り組まねばならぬ問題でしょう。

ここに取り上げた問題はほんの一例にすぎず、私にとってはあら

ゆることが研究の対象です。

地方の幼稚園にいと、欲しいと思う参考書も手に入らず、つい研究が中途半端なものになってしまいがちですが、今後全力をついて問題にとりくんでいきたいと思っています。

(幼稚園教諭・会津)

「日常の記録のこと・ 知能テストのことなど」

菊地明子

毎年、学年末に私たちのしなければならぬ重大な仕事に、指導要録の記入があります。一年間の保育のあと、ひとりひとりの子どもの顔、動作を頭の中に画きながら「肌の工合は……」「鼻汁はどうだったかな」などと自分で作った不完全なメモをみたり、日誌を読みかえしたりしながら、少しでも、その子どもの本当の成長のあとを、なるべく良心的に正確に記録したいと思って頭をいためるのです。そして、いつも、記録をしながら思うことは、来年は何とか能率的で最も適切に、各領域についての子どもたちの行動をとらえるような様式を工夫してやってみようなどと思うのですが、まず、恥かしいながら一学期の中はそういうノートをうろずめていた文字もだんだん閑散となって来たり、平均に記録がいきとどかなかったり、という、あまりみっともない状態ではなく、とうとう三学期を迎えるあたりまでです。

とくに幼稚園の場合、出席日数のように数字で現われるものが少なく、ほとんどが日常の観察記録にたよるほか、方法がない面が多いのですからたいへんです。そして結果的に、半分勘にたよったりする場合がないともいえません。

改訂された指導要録の解説書にはいろいろな補助簿のことについて説明がありますが、まとまって実際に使えるもの、となると、またちがってくるようです。まったく個人の自由にかかせられている形で、その先生によってまったく結果を異にする場合もあるでしょう。結局、先生の個人差ということになりそうです。

「指導の記録」の記入をより良心的にし、かつ日常の指導に役立つような保育手帖? のようなものがほしいと思ったりします。

それから評定尺度のことについては、各項目にあたって何か基本的な標準があればと思います。こうした評価に関しても先生方の考え方(ごく常識的なものはさておき)指導の態度によっても、だいぶちがってきますし、よくよくの話し合い、研究のすえ、最も適切と思われるものができたら、と思っています。

幼稚園教育要領の、六領域を、どのように配分し、それを子どもたちによく結びつけ指導していき、最後まで持っていくか、ということも日常の保育で考えるときにも、広い意味で補助簿、もつとせばめて、日常の記録をどのようにしたらよいか、もうすこし考えていきたいと思っています。

それから、知能テストのシーズンに、年々、思うこと一つ。これをおこなう前後の処置について。いろいろな専門の立場の先生方から、御意見や、御指導があるようですが、実際に私の身近で起る家庭での話題をきいておりますと、はたして、これでいいのかしらと思わ

れることがたびたびあります。親の知能テストに対する異状な関心と、頭がいい・悪い、能力がある・ない、という価値判断をそこに現われた数字でし、今後の正しい指導に役立てるところか、子どもに以外な刺激や、重荷を与えていることです。こうした親の教育はなかなかむずかしい問題とは思いますが、何とかしなければ、と思うことです。

(幼稚園教諭・東京)

思いつくままに

庭瀬貞子

私が幼児教育に心を注ぐようになった遠因は、幼いころ教えていただいた日曜学校の幼稚科の先生でした。フェリス女学校を卒業なさった美しいかたでした。先生のおことは何にも記憶に残っていません。ただ清らかなやさしい先生の印象が、幼な心にしつかり刻みつけられ、成長した私の心にも生きています。「清いものを幼児の心に彫刻したい」これが私の幼児教育の念願であり、一しよに働く先生方すべてに望んでいる一事です。

よい幼稚園であるためには人格のすぐれた先生を得ることです。個々の先生の持つていらっしやる特技を、たがいによく縦糸横糸に織りこんで、調和のとれた色彩を出すことです。現在、私は園舎も施設も地域環境もまことに申し分がないので、幼稚園それ自体には当面する困難な問題はありません。

強いてあげるならば建物の二階が短大保育科生の教室であるた

め、階下で園児が遠慮なく騒ぐときしばしばこれを制しなければならぬ点です。ことに学期試験の一週間は、先生方が二階に邪魔にならないようにへん心をつかい、学生が試験がすんで「ホッ」とするのとどうように幼稚園の先生も「ホッ」とするのです。

もう十数年も昔のことです。戦争がはじまった昭和十八年に、東京から御殿場に疎開して幼稚園を開きました。村の子どももおりましたけれど大部分は都会から疎開した幼児たち六十名くらいでした。まったく戦時幼稚園で何の設備もなく疎開者から寄せられたシーソーが一台、杉の木に丸太をわたして作ったブランコ、これが遊具のすべてだったのです。しかし広い島にはおいもをつくり、とうもろこしをそだてて一しょに食べました。雨が降らないときはいつでも芝生で遊んだり、森を散歩して鳥の声をきいたり、山に登って草花を観察したり、坂をころころがったりして自然は充分に子どもを遊ばせてくれました。退屈することを知りませんでした。

都会の幼稚園へ帰ってきて感じることは、花壇が占める面積のせいまいこと、野菜園のないことです。現在は温室があつて結構です。子どもが自分自分で持ってきた草花を植えて楽しむ花壇も五坪ありますが、このほかに野菜島があつて、子どものきらいなにんじんも一しょに種子から栽培し、だんだん大きくなって子どもの手で「ギョウ」と引っぱって長い赤いにんじんがでてきたらどんなによろこぶでしょう。それを兎にも食べさせて子どもたちの給食のお皿にも調理してのせてやったら皆残さずいたくでしょう。

次に環境のことにふれます。園舎が建っている地域は、よくても通園してくる子どもたちひとりひとりが生活している家庭環境や社会環境はそのまま幼児の人格の深層に食い込んで全面的に影響いた

します。保育者は毎日幼児に接し、最も感化力の強い人的環境ですから、つねに好ましい状態におくことを努めるとともに、幼稚園外の指導を考え、幼稚園内の指導が徹底するよう家庭と社会の協力を強く求めます。母の講座は毎週金曜日に開き、講演会だけでなく、見学、懇談もいたして、幼稚園の正しいあり方をはっきり認識していただきます。子どもが幼稚園で歌っているうたは全部、お母さまも家庭で一しょに歌えるように練習し、楽譜も歌詩もプリントにしてお渡ししておきます。お母さんの教育とともに啓蒙しなければならぬのはおばあさんです。問題を持っている子どもの大部分は「おばあさんっ子」で自主性に欠けております。「小さいのに可哀想だ」と同情して、孫に手をかけ過ぎるのを母親は否定したいのですが、遠慮して言えない。言えば家庭に波乱がおきるので、姑の意のままにさせておく間に問題のある子どもになってしまいます。私もは老人を尊びねぎらうと同時に、若々しい生命が、幼稚園でどんなにのびのびと、しかも自主的に活動して成長しているかを見ていたため、敬老会に園児の家庭の御老人をお招きしましたら、たいへんよろこばれました。たびたびこういう機会をつくって、幼児の発達と正しい扱い方を話しあいますなら、きっと協力していただけると思います。

(幼稚園主事・仙台)

玩具祭りの功罪

玉川喜代子

現在に直面している問題、計画と実践などについて私は第一に、本園における玩具祭りの功罪について申しあげてみたいと思います。

昭和八年十二月二十三日の暁、感激の「サイレン」によって皇太子殿下のお誕生を知ったとき、涙ぐみながら、奉祝の玩具祭りを続けようとした。それから、昭和九年十二月二十三日を第一回とし、戦争末期中絶、昭和二十二年再開して、本年にいたるまで、年々盛大になっていくわが玩具祭りは、公会堂に、二千人からのお客様をお迎えして、二つの公園と次々に三日間、公民館共催のため、おふれ、または回覧版で公示され、市の文化行事の一つとなりました。

とまれ園児はひとり残らず、劇、リズム遊びに参加して壇上に発表し、親子もろとも楽しい会食の後は、各組ごとに今度は親さん方の団体もしくは個人で、芸づくしの御披露がある。幼稚園行事のうち運動会其の他の映写を觀賞する。そして待望のかかえきれない土産を、爺婆にふんしたPTAの会長、副会長から手わたされ、高い壇上から二人ずつ母の招くところにおいていくという寸法である。この日の園児の喜びようは、入園前から楽しんで待っていることでもおわかりと存じます。

たびたびの反省会の結果会津の冬の寒さから園児の健康の面を考慮して、最近はやかりの日である文化の日を中心に繰り返されました。

さらに、PTAのかたがたの真からの御協力ぶりは、毎年のことながら、涙ぐまれるばかりです。担当の園児のこと以外は、全部PTAの運営によってなされ、かつそのかたがたが、年中の最大の楽

しい日としてまっておられるということなのです。

そこで功罪について反省し、先生がたの御示教をいただきたいと思えます。

功

- 1、園児のひとりひとりがひじょうな自信をもつ
- 2、内向性の子どもが、元気になり発表力がつく
- 3、幼稚園に、はりきってよろこんで登園する
- 4、家庭との連絡がよくなる

5、公開するため、大衆に幼児教育がいちおう理解され、入園状況は即日しめ切りの状態

6、卒園しても保護者も学生も労務提供を申しでて、よろこんで参加してくれる

7、食堂その他の御協力で設備の改善備品の増加がめだつようになった

罪

- 1、あまりにも親心を發揮しすぎる場合もある
- 2、時間が長すぎて、園児の疲労度の点で反省を要する
- 3、内容の選択をあやまると困る
- 4、保育内容がかたよる場合がある
- 5、少し費用がかかる

(幼稚園長・会津)

こんなセン、セイになりたい

谷野恵美子

まだ学生であったころ、先輩の〇先生から「子どもを叱らないで育てられる先生になってごらん下さい。やさしいようでも、これほどむずかしいことはないでしょう。人間としての自分の経験を豊かにして、つねに向上しようとする意欲を失わないよう。」ということを聞いたことがあります。

保育をする人のだれもが、健康であり、円満であり、豊かな、また、調和のとれた人格の持ち主でありたいと思ひ、精神的にも、安定感のある。健康的な人でありたいと思ひます。

幼稚園の先生は忙しい、身体的にも、精神的にも、休まる時がない、といわれますが、そこには、何か、無駄な、また偏った生活のしかたがあるのでしょうか。

友人のMさんは、教育愛にもえ、有能な教師といわれている人です。子どものためなら少しも努力を惜まないタイプで、毎日、たいへん遅くまで、今日のしまつ、明日のしたく、ピアノの練習、と時の経過も忘れるほどで、夜帰宅して、ただ一人で夕食をすませ、家族と話し合う時間もおしんで、個人記録票の記入、明日の童話の下よみ、心理学の勉強といったぐあい。指導計画もよし、カリキュラムには忠実に、父兄からの信頼もあつたといううわさ。ところが、最近よいお話があつて、おつき合いをはじめたが、相手の方の話

が合わないことが多く、たいへん苦労しているということ。Mさんは、最も得意の話題で、幼稚園であったことを話題とし「〇〇チャンは今日はこんなことをした。」とか「△△チャンは、こんないたずらをした。」などと話すのだそうです。相手の方は、いつものたのしうにきいて下さるので、理解があつてうれしうと喜んでいました。しかし数回そのようなことがあつたある日、相手の方から「今日は△△チャンはどんないたずらをしたの。」とたずねられ、胸がドキリとし、自分にはただこれだけの話題しかないのかと、淋しく感じ、今まで子どものためにと努力したことが、実際には、あまりにもかたよつた、狭い努力のしかたではないかと反省した、としみじみ語っていました。

都心の子どもは、自然物の観察が、思うようにできないと、なげいたり、「こんなにやくの木」や、かにやえびの色も知らない教師であつたり、汗もだらけの子どもをみて、母親のだらしなさをなげいたりする前に、教師自身が、自分の生活を、もう一度ふりかえつてみる必要があると思ひます。

いそがしいの一点ばりをやめて、能率的に仕事を片付け、雑務を整理し、自分の家庭生活を充ぶんに楽しみ、運動もし、音楽もきき、手芸もし、たまには山を歩くこともよいでしょう。疲れを忘れるために、ほんやり過したり、大声で歌をうたつてみることも、よいと思ひます。

たのしく台所で働き、お買物にでかけ、映画もみたり、おにごっこもするお隣りのお姉さん。気やすく話かけられ、甘えられ、そしてその中に、規律のあるたのしい生活が、子どもとともにできるやさしいお隣りのお姉さん。私は、このような、センセイになりたい

と思っております。

(幼稚園教諭・東京)

私たちの職員室

上山 幸子

私は、このごろ職員室は珍らしくもないし、日常はあまり関心もない室となったのですが、きょうは静かに眺めてみることにいたしました。

○ 私たち教職に繋がるものはだれかれの差別なく、はじめて社会にでて、幼稚園という職場に赴任して、いちおう最初に腰かけるところは、職員室という名のある部屋でありましょう。

○ ここに集る先生方は、相互の信頼と友愛によって、和というありがたい雰囲気の中、生活しているのであります。そして楽しい環境で、自分たちの仕事に努力感謝して、希望に明け暮れているのでございます。

○ ここでは、会議、協議、討論、懇談それに休養するのがこの職員室です。現状ではたいの幼稚園が、なにかも一つでまに合せている室を、職員室と名づけているようです。

○ 私たちはこの青春を一つの教育にささげて努力しております。人

生の最も活動期の生活であり、睡眠と休養の時間をはぶくと、大部分は幼稚園で暮らすことになっております。

そして一日の生活中、幼児とともにある時間は最も精力を傾注する時間であって、この職員室にもどってきての時間は、保育のありかたや反省あるいは事務のことなど考えたり書いたりしますが、また、いこいのためのオアシスでもあるのです。

○ この職員室こそ私たちの生活には、たいへんに重要な意義を持つところであると思います。

○ そこで職員室の空気というものを、私たちが住みよいものにしななければならぬと思います。それには私たちがおたがいに謙虚な気持ちで、和を造ることです。もっと明るいものにし、ここで働く私たちの心に、希望をおたがいがもつことです。

○ この和というものは、実際にたいせつなしかも根本的な問題であって、私たちは各自の活動を最大限に發揮して、人にはけつして妨げをしないという一つの線を堅く守ることです。これが和になる条件であろうし、精神でもあると私は考えているのでございます。

○ 先生たちおたがいは、いろいろな性格があります。この先生たちが姉妹のようなきもちでつきあっている、おたがいに許しあっていることが根本であろうと思えます。

○ 自分の性格に合わないからといって、けがらにするのはまちがいであります。

○ ある人が「山にはいろいろな色の木の葉がまざっているので美しいのです。一つの集りにも種々の個性があつてこそ強い力になるの

です。このように聴きましたが、これは味わうべきことばだと思
います。

○ ここになんのへだてもなく、私事について語りあって、なんの秘
密のない生活、これこそ大きな喜びであらうと思います。

私は朝に夕に「お早ようございます。」「さようなら。」の挨拶が、
明るく大きく響くことが楽しいのです。

○ この職員室にある先生たちは、いつも園児のことで頭がいっぱい
になっていられると思います。だからかなり疲労もあらうがけつし
て悲鳴をあげないし、たまたま帰園がおそくなくても超然としてい
るのです。私などあくびをかみしめたり、帰園を急いだりすること
があつてはずかしいことだと思つたのです。

それに、みんなが明るくみだしなみがよく幼児に接する心がまえ
がなかなかよいのです。

○ つまらない雑感ですが、こんな平凡なことが、あんがいたいせつ
なことではないでしょうか。

私は職員室の生活を楽しみ、問題があれば職員室にきて解決し、
楽しみも苦しみも先生たちみんなでわかちあうようにありたいと思
うのでございます。

この精神からきつと英気がうまれ、教育への道が歩まれて、幼
子どもたちの双葉の芽をのぼすことができるのではないでし
ょうか。
(幼稚園教諭・東京)

私 の 宿 題

穴井曜子

「おいらの部屋だよ、おいらの部屋だよ。」ひょうきん者のMちゃん
は、おどけた身振りで部屋中を踊り歩きました。この二期期になつ
てはじめて、子どもたちと私は、おちついた保育室をいただいたか
らです。ほんとうは私だつて一しよにうかれたくなるくらい嬉しい
のです。

この四月に入園した一年保育の二組は、保育室がないのでずっと
ホールを共有してきました。あまり大きくないホールなので、つい
立でしぎった半分をお互に一杯に使うことになるのでついおとなり
をのぞきたくなります。

何をしてもおとなりで歌いだせば、せめて一しよに歌うより
他ありません。ついたてのかけからお手洗にいく子がぞろぞろやっ
て来れば、こちらもそういたします。それに毎朝全園で礼拝その他
に使うホールは、何となく自分たちの部屋という感じがしません。

全然コントロールされていない、ありあまる精力を内に秘めたま
ま雑然とした環境におかれた一年保育児はこうしてだんだんおちつ
かない子どもになってきたようです。みんなの迷惑になるからとい
うので、毎朝数人の子が出されますが、それはいつでも、きまつて
この一年保育の男児です。何とか少しおちつかせるようにというの
で、とくに手に負えない私の組が、二年保育年少組とお部屋をとり

かえてもらった、というわけですからあまり名譽なことではありません。今日も私の組の子が二人、とうとう物置に入れられてしまいました。子どもたちが帰ったあと私は、ほんやり考えこまずにはいられませんでした。こんなふうになったのは、いったい誰の責任だろう？ いつも子どもたちだけが責任をとられるが、それは不当なことではないかしら？ もし教師が託された子どもの実体を正確に捉えて、ひとりひとりの欲求を満してやる事ができたら……あのあり余っているエネルギーを上手に発散させてやる事ができたら……そして何よりもひとりひとりの子どもに、おちついた場所をじゅうぶんに与えてやる事ができたら……。

タンポポは、葉を大地にしつかりと掘れることによって、自分に必要な場所を確保し、平凡だが健康な花を太陽に向って開く……子どもだって同じことです。

しかし現実には、余りにきびしいようです。安い月謝、狭い園舎、不足している保育室、多すぎる園児、そして何よりも無経験で無力な教師としての私自身。二年間(けつして長い期間ではありませんが)私たちが真剣にとりくんだ問題は、「いかにして幼児の成長を助けるか」ということだったので、今現実の場におかれた私は、あまりにも無力な自分を直視して惨めな気持にならざるを得ません。

何とかしてひとりひとりを伸ばしてやりたい、よい経験をじゅうぶんに与えてやりたいと、あせるばかりで、きびしい現実の制約の前に、戸惑うばかりです。実際問題として、子どもはすでに私の前にあるのですから、苦しみは切実です。しかし、限られた中で、できるだけのことをするより他ありません。たえず勉強し、工夫し試み

ることによって障害をのり越えてゆく、これこそ私に与えられた大きな宿題だと思っております。(幼稚園教諭・埼玉)

保育者の喜び

樋口伊都子

そのことが実に素晴らしいもので、ある、と感じられるようになるまでに、私たちはこんな経験を通りこして、はじめて最上の喜びを知るようになるのではないかと思う。何かによる失敗が、彼を絶望に近い深淵に立たせることもあるだろう。また、若い彼の理想も、たちまち失望にとって変って彼を打ちのめしてしまうかもしれない。いや、完全なものとの対照から、未熟な彼は強い劣等感、恐怖心に縛られる。しかし、彼はそのままでいい。ほんの僅なチャンスが彼を生き生きと、力強く蘇生させる。

それについて、私はこんな例を経験した。何もかもすべてが新しく、珍しく感じられたあの当時、学窓を巣立った雛鳥の私は、無我無中でそここにとびまわり、さまざまなることを吸収するのに精一杯の日々を送っていた。まったく喜びも悲しみも、ゆっくり味っている暇はない。いかなる場合でも同じこと、やがて慣れることから落着き、考える余裕ができてくる。まず、反省が誰の胸にもうかんでくる。明日への進歩のために考えなければならないことだからだ。私の反省、それは保育室で忙しく過してしまふさまざま場面、子どもたちとの交渉態度、すべてが望ましいものであったかど

うか。妙な絵をかいた子ども、残忍な行爲をとる子ども、いろいろなことを考える結果が、遂に強い恐怖心となって私の上のしかかかって来た。たびたび起る喧嘩の仲裁が、何の悪影響も両者に残さずすんだらうか。遊びの場面においても、生活指導においても、おとなの不当な要求を強いはしなかつたらうか。ああしたら、こうしたらあななりはしないかと、それが必要以上のいたずらな考えとなって、先廻りする。手足が完全に萎縮して、ただ「怖い」の一語がすべてを支配してしまった。たぶん、保育室の空気は陰うつな、おどおどしたものだつたらう。どこの隅からも「生」を感じとれないほどに。他の組が生き生きとしているのにひきかえ、何とみじめな姿だつたらう。とかく、私自身の考えを変えなければならぬ。まず、おとなであるという意識、教えるという態度を捨てることだ。努めて子どもたちを前にしたときに。こう心に決してから、しばらくたったある日の「話し合い」のときに、かつて、私が保育中に味ったことのない感激を覚えたのだつた。それはごく普通の会話だつた。しかし平凡に聞える言葉の内に、何か熱い気持のつたわりを強く、たしかに感じとつた。すばらしい一瞬だつた。その一瞬は、幼い子どもたちを一個の人間として私の目前に具現された。人間と人間のふれあい、心と心の接触、これを子どもたちとの間に感じとつたと知つた私の心は歡喜にあふれた。随喜の涙が頬を流れた。彼らの前に立ち、彼らから求められるものは、いつわらない真摯な人間の姿なのだつた。子どもたちと青空のもとで満身に陽を浴びながら、無心に遊ぶときこそ、きつと私の顔は、満足しきつた微笑をたたえているにちがいない。

(幼稚園教諭・東京)

掃除をしながらか考へること

栗田成子

たつた今子どもたちが帰つたあとの保育室で習慣的に、掃除をしようとうほうきを手にしながらか、今日一日の子どもたちとのやりとりを思ひうかべます。

G夫が言つた「先生、ぼく、おばあちゃんきらいなんだ。」「なぜ?」「だつて、お兄ちゃんにばかりいいおかずいれてやつて、ぼくにくれないんだもん。」と、わたしはどう答えてよいかわからなかつた。この地域には問屋が多く家の中は祖父母、父母、叔父叔母、店員と大家族制なので、いろいろ子どもにゆがみがしわよせされるようです。忙しい親は子どもを用人まかせにしたり、そうかとうと、ときには甘やかしたり、祖母の偏愛に差別されたりします。

G夫はこの差別のなかで淋しいのでしょうか。幼稚園では「先生こうするの」「先生遊ぼうよ」と、何かにつけて先生にくつついてきます。友だちと遊ばせようとすれば、友だちが仲間にいれてくれないと訴えてきます。友だちの方からどうのこうのということはないのに、みんなと遊べないらしいのです。このことで母親と話し合ひをしたとき、母親は泣いて祖母の偏愛のあれこれ話してくれました。ほんとうにこのG夫をどうしてあげたいだろうか、またどれだけのことがしてあげられるのだろうか、と思ひ悩むのです。

困るのはG夫だけではありません。S子は毎日歌のおけいこ、パ

レーのおけいこと忙しいようです。このようにおけいこをやっていることが母親の自慢の種ですが、幼稚園でのS子は、自分は動かず他人のことをとやかくつげ口をし「あんたは入れてやんないよ」などと女王のようにふるまっています。そうかと思うとH子はみんなの仲間に入ろうとせず、うづくまるようにして、みんなの遊びを眺めているだけで、誘っても入ろうとしません。

私たちは今四〇名の三歳児をうけていますが、この四〇名はそれぞれちがいがいもっています。生活の条件がちがうなかで、てんでにちがって育っています。この子どもたちが、それぞれ持っている力を伸ばしてやりながら、同時に仲よく遊んだり話し合ったりできるように育てたいと念じておりますが、子どもたちはすでにこれまでの生活のなかで、それをさまざまげられるような殻を身につけています。

どうしたらこの殻をぬがせることができるだろうか、ほんとうに悩みの種です。

私はもっと子どもの中に入りこんで、子どもと一しょにその考えをひらき、また高めていきたいし、またそのために家庭との話し口を多くし、おたがいに協力していこうとは思いますが、思いいつも実行は進みません。

そこで私たちが一歩前進するためにもっと保育の技術を勉強したり、また世間のことや学びとったりして、私たち自身の実力をつけていきたい、そのための時間もほしいし、指導者もほしいとつくづく思うのです。

(幼稚園教諭・東京)

保護者に、どのくらい

協力しなければならぬだろうか

杉本知子

私どもの仕事は、私どもだけで、一生懸命になっても、その子どもも家庭の協力がなければ、よい結果はなく、場合によっては、悪い結果を招くこともあることを覚えています。

そして、私どもの要求に応じて家庭に協力していただくことはたびたび考え、その方向に近づけるのは、わりあい容易にできるのではないかしら、ということも覚えています。

しかし、その反対に、家庭生活のよき援助者と同じくらい考えなければならぬのではないかと。家庭の要求を、どの位聞き、それを満し、さらに、保育者のもつ理想と合せていったらよいのか、と考えております。一例をあげてみますと、

必要以上にきびしい保育をされた子どもが、急に子どもの心理を考え、自発性ある子どもにしようとか心がけて保育されました。その家庭の反響は、次の通りです。以前はいいつけをよく守った、素直だった、最近、まったくいうことを聞かないし、口がたっしやになるばかりで、とのこと。母親にしてみれば、自分も一日仕事で疲れて帰ってくるのに、いうことは聞かない、口返答はする、手はかかる、気分はいらいらする、といったことで、現在の保育の方が、たいへん迷惑と感じるらしい。とにかく、子どもが母親のいうなりに

なれば、いらいらしいですむ、すめば子どもにあたらず、平温無事にその場は終る。

いわゆる便利な子どもである方が好ましいと。とくにいうことを聞かない子どもになってもよいなどは、さらに考えてはいないが、母親に、おとなに便利な、自発性のない、個性のない子どもでなく、やはりどんな場合でも、自分の意見を持ち、発言できる子どもであってほしいと望むのです。それでは必死の思いで働いて、そんなことを考える余裕などもない母親との間に、たつてどんな考えをもつたらよいのかと。また五歳児となりますと、地域によって違いますが、学校にあがるための準備教育機関と考えてなんでも教えてくれるよう、要求し、また保育園にすれば、自分が教えられない点を教えてもらつて、学校にあがるにもいいから、という考えで、保育園をみ、保母をみている傾向があります。

学校側と相談して、その旨を母親に話しますが、誰しも、自分の子どもが少しでもよくできて、ほしい、と望むのは同じでしょうし、働く母親は、昼間見られないからと、なお一そう心配することも考えあわせて、自分たちのみられない点を、生活に必要な、基本的習慣、身体の清潔、愛情の欠乏におかないで、勉強のことにのみにおいている母親たちとどんな方法で協力していけばよいのか。

二つの同じような例をあげましたが、他にもいろいろな面で、母親の要求点と子どもの理想との間にマッチしない点が起つた場合、子どものことはよく考えられても、子どもにつながる母親にはこちらの理想に基づいた要求ばかりで働く母親側の要求を聞くことを忘れがちではないかしらと思えます。こういう点については、どんな考えかたをもつて、母親と力を合せて、子どもを保育すればいいの

だろうか、私も一人一人の保母が。(保育園保母・東京)

私の園における問題点

齋藤 勝子

就職してから早くも半年、学校時代に教わつた理論もそつちのけで、職場のごとき保育。その中で困っていること。解決しなければならぬこと、職場にでて学校時代に教わつた理論と、実際の場におけるギャップなど、問題点をあげてみたいと思います。

第一は、子どもの人数が多いということです。私の園では三歳児はいず、四―五歳児だけ。四歳児が少なく五歳児が多いので、四歳児ひと組、五歳児ふた組、保母は新卒のものばかり四人、保母の人数で子ども的人数を割れば、最低標準でちょうどよいのですがそうはいかず、四歳児に二人取られ、今年卒業したばかりというのに、五歳児を三十八人うけています。人数を聞いただけで、できるかしらという自信のなきの不安が強かったのですが、やればできないことはないという自己のいかばかりで、どうにかここまでできました。

こは、公立の保育園と比較して、だいぶ特殊な条件におかれています。場所は会社寮の中にあり、建物は新設で、公立などは狭くて困っているのですから、広いということは幸せなことかもしれないが、なにしろ三十六坪の部屋を、真中にし切りがしてあるだけなので、隣の先生の声がつつぬけというありさまで。明るさ

も、明るすぎて、子どもたちも落ちつけず、たいへん不安定な状態です。そこでまず、少しでも暗くしおちつかせるために、布地を買ってきてカーテンを作り、取りつけました。それでもまだ明るいくらいです。保育室の前が通路のためいろいろの人が通ります。カーテンは保育室を見えないよう防止すると、両方の意味あいのでつけたのですが、布地が軽いため風が吹けば端によってしまします。部屋を狭くし、どうしたら不安定でなくすることができるか、これは私たちの考えなければならぬ大きな問題です。

第三としてやはり大きな問題は、現実の子どもの姿です。園にきている九〇％は寮生活者です。子どもたちは寮という一つの地域集団に属し、寮の中の限られた人とはつねに接しているのですが、寮外の人とは接することもなく、寮外の子ども（保育園にきている外の子ども）とは、遊ぶことができないわけではないのですが、ほとんど遊ばず、寮の子どもは孤立し団結しています。寮外の生活を知りません。このことは大きなかたよりをつくっています。父親は工員です。夜勤があります。その場合子どもが家の中ないしは、廊下で遊んでいたのではうるさくて休めないのです、必要上おってできたのがこの保育園なのです。寮は木造建築のため、二階で騒げば下に聞え、隣りの家でラジオをかければ聞えてくるという状態です。このような環境の中で、しかも、おとなたちには邪魔者にされ、教育に関心のうすい親たちに育てられた子どもはどのように成長するでしょうか。この悪条件の中で、いくらかなりとも良くするには、どのようにしたらよいか、今後残された大きな問題です。

では、このような職場について学校における理論と実際を、どのようにいにかすか。子どものおちつきのないのは、部屋のためばかり

でなく、技術の問題が多分にあります。学校において教わった理論は片隅において、一日が終り、反省のとき、はじめてそうであってはならない、ああであってもならない、こうでなくてはなどと思ってしまう。毎日毎週毎月、反省がなされても進歩はないようです。

はじめてうけもった子どもたちを、来春は卒業させ小学校に送らなければなりません。自分の姿が、そのまま子どもの姿になり、自分の目の前にさらけだされるのがたいへんこわいと思います。

幼児は心身ともに成長する。先生は心身ともに日々疲労を感じ、この間のギャップをいかにして埋めるか、子どもとともにつねに若く、そして健康であり、マンネリズムにおちいらぬ保育がしたいと思います。

(保育所保母・川崎)

「共稼ぎ雑感」

玉木直子

保母になって早くも五年、その間に、他人はいろいろなことを言う。「尊い仕事ね」「子供と遊んでいられて楽しいでしょう」「結婚して役立つわね」「たいへんね。家庭に入ったら止めるのね」等々。まったくさまざまである。保母と家庭、本当に両立しないものだろうか。否、恋愛すら、時間がなくてできないと、現場から声が出る。女性の社会的進出、地位の向上を願いつつ、その子どもたちの福祉にあたる保母が——結婚したらやめる。あるいは、あきらめきって、干からびて行く——保母も女であり、人間なのだ。この矛盾

に、若い保母たちは皆悩んでいる。しかし、逆に、女だけに与えられた職場であるから、より理解し合うのは簡単だし、実行できるともいえる。さらに、そうしなければならぬのだと考える。私の場合にしても、まったく交際期間中苦しかった。会うのはいつも七時半過ぎ、それも必ずといって良いほど、遅刻。話しあうのは夜中、そして明くる日は早番とくる。「理解し、協力すれば大丈夫できるよ」の言葉を、唯一の頼みに、そして何か、自分がやらなければという宿命のように、大きな夢を見て結婚をした。それから半年。「やればできる」という自信。それには、口で表わせないほどの理解と見守る力が必要だと痛感する。私の場合、同僚の先生がたが非常に力になってくれているので、幸福である。しかし、結婚した者は、それに甘え、自分で特権的な考えを持ってはならないと思う。けれど、どんなに分っている、時間が長いということは、非常なオーバーワークである。保育所に預ける親たちの職場はさまざまで、もし、その各々が、八時間労働を守っているとしても、勤めの前に預け、帰りに迎えにくるのであるから、最少限、保母は、九時間労働ということになり、現在では、八時間制も守られていない職場も多く、出勤時間もさまざまで、その上保母の通勤時間を含せると、まったく保母の労働時間は、何をかいわんやである。早番、遅番を交替にしても、小規模の保育所では、一週間に各々二回はまわってくる。「早く迎えに」と願いながらも、自分が、もし預けていたらと考えるとき、どうにもならないせつなさを感じる。人の子どもを育てて、自分の子どもは随胎しなければならぬ、という事実もある。子どもすら生めない生活は、どん底である。近き将来には、二交替制とか、フリーの人を置くとか、職場の中に保育所を作ると

か、何とか考えなければならぬ。結婚したことで、保育の研究時間は少くなり、マイナスの面も大いにある。しかし、今までやろうとしてもやれなかったこと、つまり、家に帰ったら、保育のことを忘れて自分の生活をするのが、必然的にできるようになった。保育の面に、家事のことや、疲れを持ちこまないのと同時に、保育のことを、必要以上に持ち込み、家は寝るだけの、宿のような生活は、避けるべきだと思う。この必要から、五分なりと、時間内に仕事を処理することを考えるようになった。時間を合理的に使う工夫。私たちは、もっと練習しなければならぬのではないか。決して怠けたいとか、時間が過ぎれば良いという考えでなく、サービスの限界をはっきり自覚することである。しかし、このことは非常に難しい。そして、結婚した保母たちを総合して眺めたときに、その家族構成によって、非常な差異が認められるという。家事に疲れきった保母、生き生きとした保母、暖かみのある保母。口では協力というが、なまやさしいものではない。夫の妻として、女としての理解だけでなく、保育者としての、尊敬と理解がなければ、とても保母と家庭は両立しない。そのために、相手の撰択は非常に考えなければいけないと、早川先生も話しておられる。保母と家庭。最近では、数多くの先生がたが両立させていらっしゃる。その方々から見れば、まだまだ、一步踏みだしたばかりで、何もかも夢中である。これからも、多くの障害が待ちうけているだろう。後からくるかたのためにも、一つ一つ、乗り越えなければならぬ。理解と協力。この大きな力をもって、そして、家庭と保母などと、とりたてて考

えなくて良い日が、早くくるように願っている。

(保育園保母・東京)

新しいものへ

丸 杉 澄 子

子どもの園は、昭和卅年四月に、桐明女子学園の初等部として、短大までの一大綜合学園の一課程として創設されました。組の編成は、一年保育、二年保育各一組ずつで、総数は約七十一名になっています。特徴の一つとして、小学校との密接な関連、さらに中・高との交流があるとおもいます。小学校との関連も多くの研究課題を持ちつつ、三年目をむかえましたが、現在だいたいにおいて一貫した教育目標に向って、歩みだした感じがします。ここで問題としてとりあげたいのは、保育内容とその形態について、今までやって見たこと、現在やっていることをかえりみて、今後に残されている問題にふれてみたいとおもいます。創設当時、何もかも新しいところで、私どもは大きな野心をもって、従来の幼稚園の形式、内容にとらわれず、基本より考えなおして何か新しい物を作り出そうと、希望にもえて出発しました。保育の形を自由保育として、保育内容は、コア型に近いもので、保育項目に示されたいろいろ経験の様式や経験の領域を、その中に織りこんで展開されていくある種の大きなプロゼクトを構成して、それを毎日のプログラムの中心において、子どもの興味、活動に重点をおきました。単なる技術の修得、たとえば折紙がきれいに折れるとか、歌が上手にうたえるとかいうことよりも、自由遊びの中によるこんでその日の仕事に飛びこみ、

たのしく遊んで帰る子どもの後姿を見て心あたたまるものを感じ、満足していましたが、このような児童中心主義カリキュラムというか、ともすると安易な方向に流れやすい自由保育に安住できなくて、子どもの興味、自由な活動を尊重しながら、そこにある計画性をもち、しかも子どもの生活にびったりしたりしたカリキュラムであり、保育形態でなければならぬと反省し考えさせられました。そこで今年、教育目標を知能、情緒、社会性と項目を大きく三つにわけ、それぞれを六領域にあてはめて考えて見たのです。たとえば、「音楽リズム」について知能の面では、リズムによる時間、感覚をはつきりともつことをねらい、情緒の面では音楽の美しさをよく感じとり、音楽を好むことを目標にし、社会性の面では一しょにたのしく歌ったり踊ることができるということを目標にする。そして一年間の流れを三つの大きな目標にわけてみた。「集団になれる」、「自主的に活動する」、「グループ活動を積極的にする」。この計画と実際の保育の記録にもとづいて、私たちは、今後よりよい、独自のカリキュラムの作成を望んでいます。そこで決った形にとらわれず、保育の内容および形態を毎年変え、従来の、年中行事やごっこ遊びでうずまわっているカリキュラムから脱却して、新しいものを生み出す方向に歩んでいきたいとおもいます。真の幼稚園教育のありかたを考えるべきではないでしょうか。家庭教育で得られない集団的な社会的生活の経験の場であるから、そのカリキュラムにもられる生活経験も集団的で民主的に運営される、組織的なプロゼクトでなければならぬとおもいます。

(幼稚園教諭・東京都下)

幼児と保育

幼年期の情操教育について、早川元二・山村きよ両氏の共同研究を中心とした特集は読みごたえがある。和やかな家庭が第一」という村岡花子氏の訪問記には

じまり、井坂行男氏の「三つ子の魂百まで」では、幼児期のしつけの重要性がとかれていいる。「幼児期の子どもは何といつても情緒ないし感情が中心となつていいる。(中略)道徳的な情操についても、なぜそうしなければならぬかといった知的なもの、背景からではなく、そうすることの喜びや楽しさを身に味わせる時期なのである。そしてその喜びや楽しみは、行為そのものからくるものであるよりも、その行為に対して与えられる親とか先生とかからの是認の賞讃

によつて生ずるものであるといえよう。だからこそ幼児期においては周囲のおとなの影響がもつとも大きいのである。(後略)」以上は、この時期の子どものしつけのあり方を明示するものであろう。

「幼年期の情操教育」では、実際に幼児の情操をゆたかに伸ばす上におこつてくる問題と、それを解決する方法がとりあげられており一読をすすめたいものである。

その他、手塚又四郎氏の「彫刻とあそぶ子どもたち」の中で、北欧のカクツムリの砂場の話などたいへん興味ぶかい。また、品川孝子氏の「子どもをみる目」は、月号は「けんかも子どもを伸ばす」であるが、これも、しつけのやさしい解説として楽しく読める。

保育ノート

長い夏休みを終つて迎えた第二保育期にあたつて注意すべきこと、考えなくてはな

らないこと、具体的な扱い方などが、いつものように自然・ことば・絵画製作・音楽リズム・社会(あそび・社会かんさつ・生活指導)健康という保育の各項目についてのべられている。

そのほか今月の特集としては「特殊才能にめぐまれた子ども」となつていいる。内容は、①「特殊才能のみわけかた」(竹田俊雄氏) ②「幼児の音感教育」(井上範子氏) ③「知能の高い幼児の教育」(村山貞雄氏) ④「親の態度の指導」(松村康平氏) で、特殊才能およびそれにつれて考えられることがいろいろの角度から書かれていいる。

題名にもあらわれていいるように特殊才能という場合、幼児では音楽や絵がおもな問題となる。とくに音楽の場合は問題が多い。野心をもつおとなの考に影響され、子どもがむちゃくちゃに扱われているということをしばしば聞く現在、世の中の人が、子どもをかたよらない人間に育て上げてから専門の方にすすむ という正常な考えに

もどることを期待している。

その点、②では、特殊教育としてはなく、園児全体に遊びとして興味をもたせるようにしながら音感教育をしてきた体験が書かれている。こういう資料の少ない現在、興味のあるものである。④では、特殊才能を持つ子どもの親の態度を三つの型にわけて述べてある。

保育の手帖

グラビヤの新中国の子どもたち、本文の守られている中国の母と子、の記事は新しい中国の状況をよく物語っており眼をひかされる。筆者は訪中婦人代表全社協保母の会委員長の梅森幾美氏。国家建設のため婦人の活躍が拡大し、それにもなつて母体保護と託児施設の整備ということをよく考へている点が強調されている。

リズム感のない幼児の指導についての質問を長谷川新一氏（指揮者・東京少年合唱

隊主宰者）が答えておられる。現場ではそれに近い問題によく直面するので、参考に抜すいさせていただく。音痴には音の高低を正しくうたえない旋律音痴と、音の長短を正しく表現できないリズム音痴との二つがある。発育不十分な幼児には、これらの欠陥がままあるが、おとなになってからの実際の音痴というものはほとんどくない。

聴覚の発育不十分の幼児の場合には、これらの欠陥を見いだし、個人指導をする。幼児のころにリズム感、音程感の悪いものを個人指導して正しいものをつかむようになった例は多い。何よりも根気よく幼児の間に個人指導をするのがよい。毎日二、三十分音の高低を指導し最初の第一音を正確にとれるようにし、段々につきの音程へと教える。リズムでも二拍子のやさしいリズムから指導者と同じに打てるようにする。一つの形が正しく打てるようになれば心配ない。以上、具体的指導法もかかれていますし、周囲の人や本人も音痴という固定観念

を持つてしまうことが、いかにつまらないことがよくわかるのである。

幼児の絵について、霜田静志氏が、今月号から筆を執られている。児童画に対する興味や研究のことがかかれ、絵の指導には心理学者や幼児画の研究者の間にいろいろ説もあるが、保育目標としては創造性を育てることに意見が一致しているということである。指導の方向などについて、研究の結果や御意見を来月号もつづけて読んでいき、自分のとっている指導法とあわせ考へていきたいものである。

保育

巨次をみると、何か新しいものはないか、参考のものはないか、まずわれわれはこう期待してみる。月刊なるものは、連続のものも多く、取材は真新しくはないが、つねに同じ指導者が、あけるごとに顔をのぞくのはこう一年間続いてみているといさ

さか、またかという顔もしたくなる。一冊の本をみることを考えればまたちがうだろうが、毎日を忙しく、しかも勉強したい幼稚園の教師には、少からず、広き指導者の声が聞きたく、勉強したいものである。

九月号の保育の目次を紹介しよう。

幼児の視聴覚保育(2) 阪本越郎

たのしく教育的な幼児の時間の番組を

武井照子

保育にとりあげた幼児開放送の実際

勝田 節

以上は字のごとく視聴覚に関することであり、いずれも実際にやくに立つ。

莊司雅子氏の「幼児の成長発達に必要なものは、現在、種々の方向にすすむ保育方針に対して活を入れていただいたようである。新まいも、老練もともに読んで勉強し、反省すべきことだろう。

月刊保育カリキュラム

今月の「望ましい教師の姿」は莊司雅子氏が書いていられる。じゅうらいのわが国の一般的な考えかた(幼稚園の先生は、いちおう、歌って踊って絵がかければ、とくべつな教育を受けなくてもなれる)を一掃して、もっと高い、学問的教養を身につけ、洞察力をもって子どものひとりひとりをほんとうの意味でしり、正しい指導をしなればならないことを強調し、よい幼児教育者の備えるべき条件をいろいろあげていられる。一読したい頁である。

平井信義氏、千羽喜代子氏の「幼児の栄養について」は、子どもたちのおべんとうの指導に対して、まず基本の栄養素の理解が第一として四つの栄養素について説明されている。さらに栄養の摂取量、幼児期の栄養のあたえ方が示されていて、これから食欲のすすむ秋に、大いに知識を得て、同じ食物でも活用し、おいしくて栄養あるおべんとうになるよう、親たちとともに勉強したいものである。

保育内容の中では、たのしい夏休みを語りあい表現しあうことが各部でとりあげられているが、音楽リズムもその一つ。山の生活、海の生活を一つの音楽の流れによって遊ぶことは、子どもたちは喜ぶに違いない。一方法を紹介してあるので参考になると思う。

植松治子氏、鈴木とく氏の「三歳児の保育技術」は、幼稚園、保育園の各立場から、この頃の子どもに適切な指導を細かに書いていられるので、むつかしい三歳児の指導の一助となることと思う。

保育の友

この四月から、はじめて保育という仕事にたずさわりだしたばかりの者にも、もう半歳という保育生活の月日が流れた。九月という月は、一応このへんのところまで半歳の保育経験を反省し、将来への道をたてなおす必要がある。

その点で、四人の保育者が経験と抱負を語る本号の座談会「わたしは保母一年生」という記事が参考になる。彼女たちは、過去の保母の向上をばんできたものは「保母という仕事は天職だとか、何ごとにもたえしのぶという犠牲的精神であった」と批判し「私たちの保母生活はたしかに苦しい。お風呂にもゆっくり入れぬありさまだけれども、私たちはへこたれない。」と語り、さらに「互に手をとりあつて行こう。保育という仕事を腰かけ程度に考えないで、結婚し、子どもが生まれても続けられる職場にしよう。」と力強くうたいあげている。「保育のコツ」という記事が次にある。こうした熱心な保母一年生たちには、コツを教えることは早すぎるかもしれない。しかし、結論としてでていることは「コツとは要領よくやるということではけつしてない。たえざる研究によってのみ生まれる優れた教育技術、これがまことのコツである。」と説明している。六人の保育園園長が

随筆的に書いていられるけれども、コツ論には、どれも一本背骨が通っているという感じがする。

講座「子どもの健康」は面白い点をついている。それは子どもの健康は、落度のないうように世話してやることではなく、もっと積極的に、子ども自身に体のことを知らせてやる必要があるとし、称して「幼児たちの生理学」を教えている。

このほか、梅森幾美氏の「中国の託児所の紹介」が記事として目新らしい。

幼児の指導

幼稚園の行事の中で最も子どもたちに喜ばれ、またおとなたちから期待されている運動会についての特集が目をひく。

運動会のねらい、役割と分担、種目の選択。練習のあり方、賞について、新しい遊戯などについて、書かれているので、子ども本位に楽しい運動会を考える一つの手掛

りとなるであろう。

連載の「世界の子どもたち」中国のおおらかに育つ子らの一文も興味深い。昔のすきをねらつては、ちょっと置いたものをかすめてゆくずるさ、人を見れば何かほしそうにおもねる態度など、新中国の子どもたちの中には見る事ができない。小ぎつぱりとして、にこにこ明るく、人なつっこい子どもばかりで、おどおどしたり、はしゃいだりすることもなく、何となく大らかに感じるといふことや、中国の家庭や隣同志では、子ども的人格も認めあつていふ実際の例など、何ものにもゆがめられないで、すくすく育つてゆく中国の子どもの幸福を祈りながら、読むにふさわしいものである。

保育界ニュース、文部省の園公私立幼稚園の実態、および、昭和三十一年度の身体検査の結果の発表なども参考になる記事である。

幼児の教育 第五十六卷 総目録

第一号

幼稚園教育の実際指導の充実へ 及川ふみ

職業婦人とその信条 蠟山政道

幼稚園創設八十周年記念式典

保育計画の実際 お茶の水女大付属幼稚園

市川学園

ヨーロッパの旅 平井信義

保育者の任務 西本脩

新築に際しての施設設備について

岩佐崇子

幼稚園における運動用具の効果

愛珠幼稚園

幼稚園からきた子ども 牧野友子

幼児の知能の研究 就学と知能 村山貞雄

オステンドルフ家に新しく生まれる赤ち

USIS提供

第二号

自信のない保母 牛島義友

幼稚園創設八十周年式典讃詞

社会的変化と教育制度

保育計画の実際

なぞれ幼稚園・文京第一幼稚園

幼児の社会性ののびし方

文部省令第三十一号

幼稚園設置基準へ公布

東京都私立幼稚協会の創立二十周年をむかえて

年をむかえて

八十年まえの幼稚園音楽

保健面のしつけについて

グループ遊びにおける言葉について

保育者の心理の研究方法

幼稚園から来た子ども

ヨーロッパの旅

(11月号) 保育雑誌より

人間の家庭で育てられたチンパンジーの子 山下俊郎

幼児教育のねらいと指導計画 三木安正

安全教育のための計画——その基礎資料 齋藤房江

問題児の指導と治療 舟木哲朗

—— 盜癖の子どもについて ——

理想の保育者の資質について① 西本脩

九州幼稚園連合大会報告 山内六郎

言語教育における 1年、2年、3年保育の能力差について 杉村澄江

幼児のボール遊びに関する研究④ 岡本卓夫

ヨーロッパの旅 マールブルク 平井信義

幼児教育における個性の考え方 岡田正章

幼稚園から来た子ども 明間進子

就学と知能(下) 村山貞雄

(12月号) 保育雑誌より

新入園児の取り扱い 多田鉄雄

施設と子ども 及川ふみ

第四号

新入園児の取り扱い 多田鉄雄

施設と子ども 及川ふみ

子どもとひるね

豊田いと

子どもとけんか

梶原満喜子

教育計画の実践

村瀬祥子

幼児のボール遊びに関する研究⑤ 岡本卓夫

理想の保育者の資質について② 西本 脩

(座談会) 三歳児の保育

津守 真 川崎千束 原田春子

三浦光代 渡辺京子 及川ふみ

堀合文字 関 治子 石黒京子

守永英子

西日本幼稚園教育指導者講座概況報告

名島 貢

第五回全国幼稚園施設研究大会 浅野寿美子

広島大学幼年教育研究会の誕生と事業

莊司雅子

ヨーロッパの旅 スイス 平井信義

幼児の知能の研究(12) 知能検査の誤差と

信頼度(上) 村山貞雄

(1月号) 保育雑誌より

第五号

幼児死亡

斎藤文雄

幼児教育の危機再論

教育計画とその実践

私の園の程究・組の研究

保育遊具の工夫

知能検査を通しての幼児教育の推進

人となるために

家庭との連絡について

私たちのあゆみ

——ともに生みだす遊戯会——

創るよろこび

粘土あそび(三年保育)

施設と子ども(賤機幼稚園)

理想の保育者の資質について③

ヨーロッパの旅 美しい五月と

もなれば

幼児の知能の研究(13) 知能値

の誤差と信頼度(中)

(2月号) 保育雑誌より

新しい幼稚園の教師

第六号

坂元彦太郎

桐乙女子

古賀淑子

山口菊代

板東和子

松田好枝

中谷久子

手塚せつ子

植田有子

菅沼義子

西本 脩

平井信義

村山貞雄

及川ふみ

「幼児教育の危機」に対する反省

施設と子ども(桜花幼稚園)

教育計画とその実践

大阪市立常盤幼稚園

名古屋私立青葉幼稚園

西桜幼稚園研究集会

放送教育

自然の環境設定

東京の幼稚園展

幼稚園の自然観察環境について①

幼児のボール遊びに関する研究⑥

理想の保育者の資質について④

ヨーロッパの旅 緑の六月

幼児の知能の研究(13) 知能値の誤差と信

頼度(下)

(3月号) 保育雑誌より

秋山ちえ子

林 敦子

広岡キミエ

山口たつ

樋口澄雄

小山田幾子

上野初枝

友松あきみち

松村義敏

「幼児の教育の危機」を読んで 牛島義友
〈教育計画とその実践〉

幼稚園教育課程の運営の研究①

津守真、佐久間重代 他

書評 品川不二郎著「幼児の教育相談」

定方とく

子どもの印象から見た親への理解と要求

室谷幸吉

〈特集〉教師が子どもを理解するには

記録を通して子どもを理解するには

小口忠彦

絵を通して行動を通して子どもを理解

角尾 稔

教師が自分自身を理解するには相場 均

帆足喜与子

河尻朋子

実際保育の場で子どもを理解するには

宇田川照子

谷口喜久子

(4月号) 保育雑誌より

第八号

「幼児教育の危機」に関連して 山下俊郎

二期期の指導にそなえて

子どもたちの夢や創造力を豊かに 加藤清子

一学期の反省と夏休み 杉本陽子

東京の商業中心地の幼稚園の課題手塚佐枝子

—夏の保育—

夏の幼稚園

保育園の生活と夏休み

—野外保育—

日比谷公園での野外保育

園外保育

千代田区の野外保育

自動車の古タイヤで遊ぶ 大日坂幼稚園

施設と子ども

幼稚園教育課程の運営の研究② 静岡大学付属幼稚園

津守真、佐久間重代、他

スエーデンの思い出

幼稚園の自然観察環境について 松村義敏

幼年期の成長発達と教育

(5月号) 保育雑誌より

第九号(日本保育学会第十回大会特集)

研究発表 第一日

発音発達検査の試み

幼児の道徳性に関する研究

市村尚久 村山貞雄 江渡礼子

幼児の反抗期についての一考察 林 貞子

幼児期における自意識と知能との相互関

係について 高橋さやか

幼児指導のためのパーソナリティの一

調査 小林幹夫

保育者におけるパーソナリティ・インウ

ェントリーによる性格の類型的研究

日名子太郎 多勢豊次

積木遊びにおける幼児集団の比較

清水エミ子

就学猶予児童のその後の運命について

長竹正春 加藤 翠

七才女児の予後診断 平井信義 森脇多恵子

日・米・独の小児の発育の比較からみた

わが国の小児の発育向上に関する指針

平井信義 千羽喜代子

健康観察結果の処理について 藤本千代

幼児の間食に関する調査

武藤静子 加藤翠 桑原 綱

幼児教育誌を通じてみた初期保育界の動向

本田和子

絵本に関する一考察

寺田豊子

Finger-painting について(4)

親の態度と子どもの描写活動との関係

小西勝一郎 並河信子

童話の絵画表現について

内山憲尚

子どものしつけに関する一調査

森 重敏 上原万里子 内山綾子

その一 子どもの生活実態を中心として

その二 母親の教育態度を中心として

その三 家庭的背景を中心として

共稼ぎ家庭における児童

―両親の生活としつけ―

研究発表 第二日

自然保育と史的背景

保育所・幼稚園に対する家庭の理解と期待について

芦田 昇 高橋恵子

幼稚園保育の効果(第一報)

多田淑子 村山貞雄

幼児の発達と保育期間との関係(その一)

宇屋光雄 釘宮冴子 高橋洋子

三年保育児に見られる傾向

中村徳子 福永かをり

幼児の音感教育

佃 範夫 井上範子

幼児期における美術教育

―認識過程としての美術教育批判

守屋光雄

幼児教育の考え方

―ユメニウスの宗教的・感覚的

岡田正章

仏教保育の在り方

友松あきみち

児童相談の諸問題(第一報)

砂田恵一 砂田穰二

取り扱い難い児童の一例

村松功雄 斉藤茂太 岡 玲子 砂田穰二

遊具の所有化される過程

共同研究 桑田明子

我が国における幼児保育史

山下俊郎

講演

村山貞雄

保育十か年を顧みて

山下俊郎

シンポジウム

保育者養成の諸問題

西本修、珠川善子、江成静江

山本ひかり、小川正通

学会記事

第十号

幼児教育雑感

波多野完治

欧米の家庭と子ども

吉田 昇

環境と保育

保育日誌から

川崎千束

狭い園の保育

秋田好枝

施設と保育

原田春子

豊田英雄子先生

安 省三

倉橋賞を受賞して

高橋恵子

水戸大会をおえて

小林 操

ハワイの幼児教育

対談 堤 幸江

堀合文子

幼児教育実務指導研究会分科協議会より

幼稚園教育の効果をとためるために体育

をどのように扱ったらよいか 桜井たか子

童話を書く子どもたち

室谷幸吉

A C E I 一九五七年度研究大会報告

黒田成子

デンマークの旅

平井信義

アルウィン先生をおしみて

高崎能樹

(6・7月号) 保育雑誌より

第十一号

幼稚園の性格再論

多田鉄雄

子どもの発育の新傾向

平井信義

道徳教育と生活指導

土屋真砂子

生活指導と道徳

おはなし・劇あそびをとおした幼児の

生活指導

鈴木正子

いなかの子どもたちから感じとるもの

八坂富子

よい気持で暮す子ども

大熊米子

中学生の生活指導

内田安久

幼児の言語指導

村田修子

(三歳児) 入園初期の言語指導

村田修子

(四歳児) 劇あそびへの一過程 関 冷子

(五歳児) ラジオの聴取活動とその発展

的あそび

村石京子

日本私立幼稚園教育研究全国大会をおえて

笠原秀定

全国国公立幼稚園研究協議会の報告

齋藤敏夫

農繁期の保育から

本田和子

幼児のボール遊びに関する研究⑦ 岡本卓夫

よい保育者を養育するためには――保育短

期大学入学者の実態から―― 岡田正章

日本保育学会の幼稚園教員養成に関する

陳情について

山下俊郎

幼児教育実務指導研究会分科協議会より

(8月号) 保育雑誌より

訂正 前号「日本保育学会の幼稚園教員養

成に関する陳情について」の文中、(五十四

頁下段) 矢野真祐殿とあるのは、天野貞祐

殿の誤りにつき、ここに訂正いたします。

幼児の教育 第五十六卷第十二号

定価五〇円

昭和三十二年十一月二十五日印刷

昭和三十三年十二月一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌ご購入についてのご注文は発売所
フレーベル館にお願いします。



一個わずか三〇円で、こんなに幼児の生活を楽しくするものが、他にあるでしょうか？ しかも、一生何をするにも大切な、リズム感をよくするのに、なくてはならないものです。だから、どこの幼稚園にも、保育園にもあるのですが、ぜひ一人に一個を持たせましょう。

いろいろな類似品がありますが、やっぱりこれが一番工合がよいと言われています。どこかの楽器店にも（アメリカでも）必ずあります。營紐もあります。

1個30円

株式会社

白櫻社

改訂 幼児の教育内容とその指導

お茶の水女子大学附属幼稚園・幼児教育研究会 編



(絵画製作)

- * 園での幼児の生活に、どんな内容をもりこむか。
- * その幼児にどのような指導をしたらよいか。
- * このような初版本編纂意図の上に、実践遂行の上で、さらに、掘りさげ、増補・改訂されたのが、本書です。

上製本

A 5判 352頁

定価 320円

古い歴史と新しい編集の観察絵本

キンダニブック

＝第12集 第10編 1月号予告＝



☆お子さま方の感情と知識を

豊かに育てる絵本☆

A4判・16頁
毎月付録付
定価四十五円

〓一月号内容予告〓

おしよがつのあそび

☆はね 絵・吉沢廉三郎先生
☆すころくあそび 絵・林 義雄先生

☆たこあげ 詩・平塚 武二先生
絵・井口 文秀先生

☆とらんぶ 絵・武井 武雄先生

☆かんま たけうま 絵・河目 梯二先生

☆まりつき 詩・巽 聖歌先生

☆はねつき 絵・初山 滋先生
詩・大木 実先生

☆はねつみ もちひき 絵・駒宮 録郎先生
詩・野田 棟先生

☆ゆきとこおりのあそび 絵・鈴木 寿雄先生
絵・太田 大八先生

別冊付録「つばめのおうち」
特別大付録「すころく こともの
いちねん」

東京都千代田区 株式
神田小川町 2の5 会社

フレール館

電話東京 (29) 7781~5
振替口座東京 19640 番

29
B